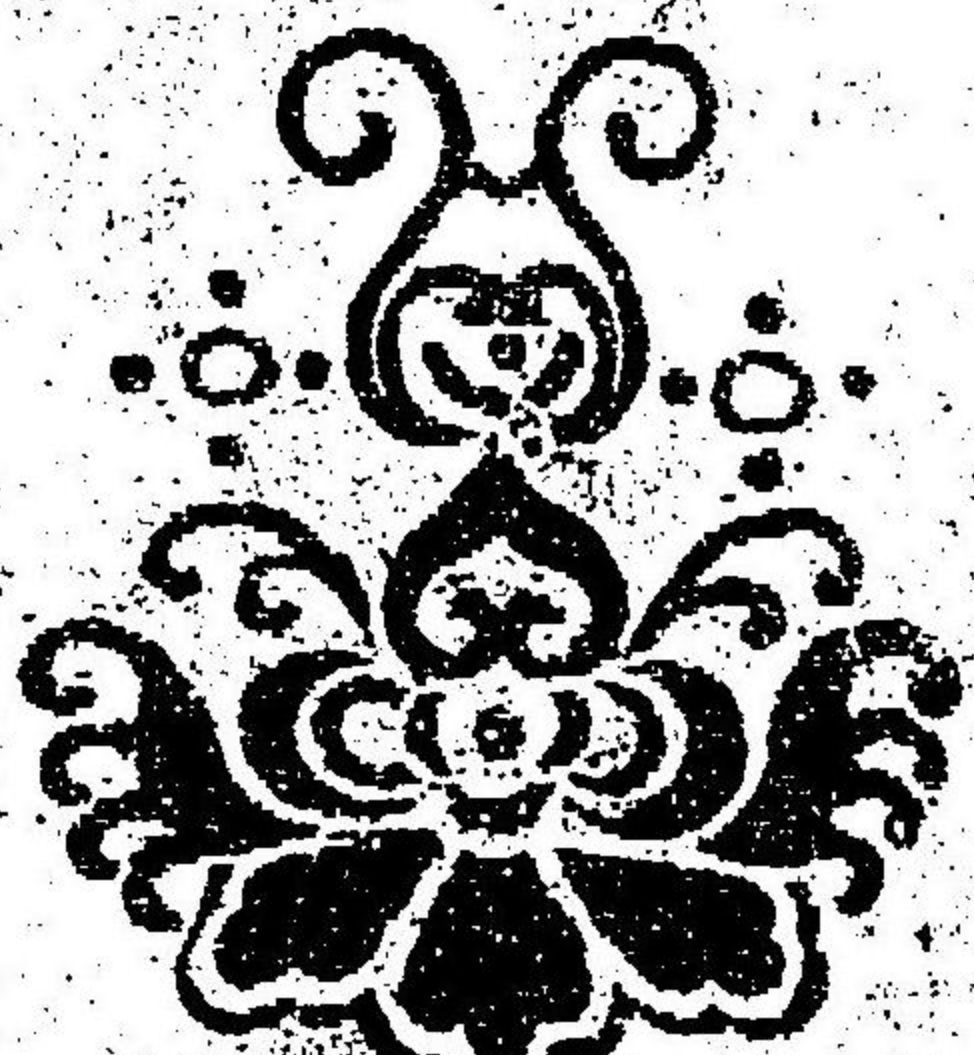
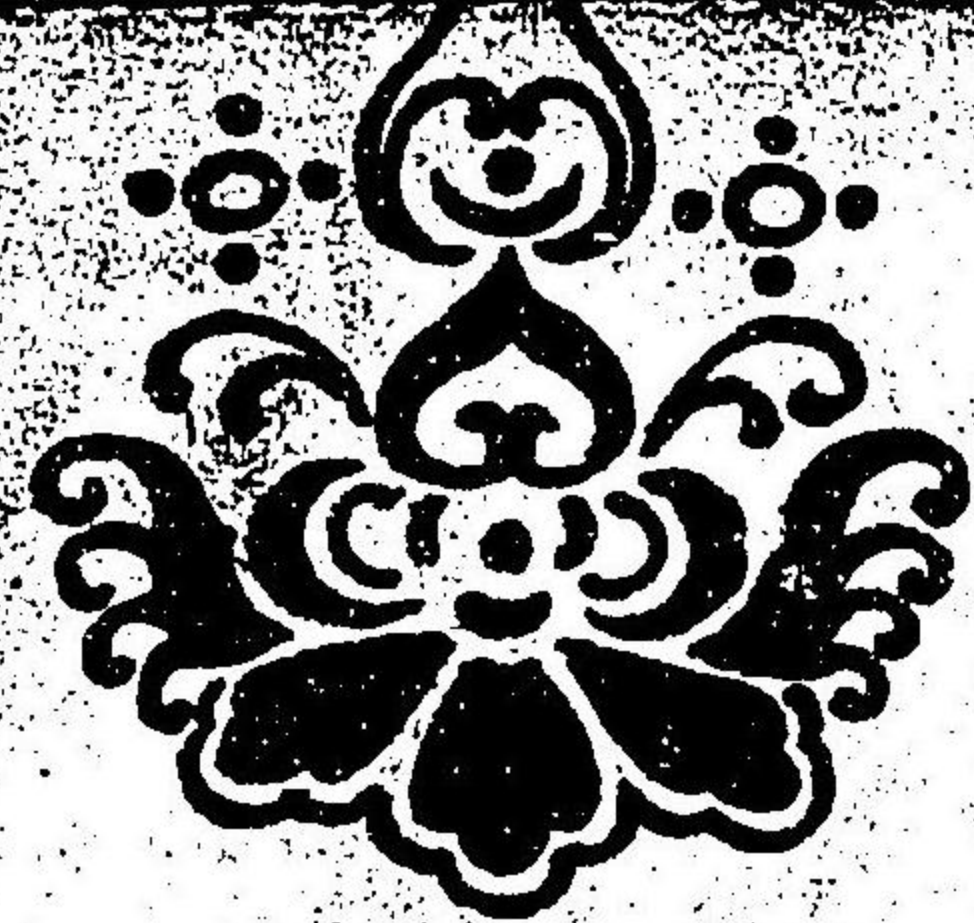
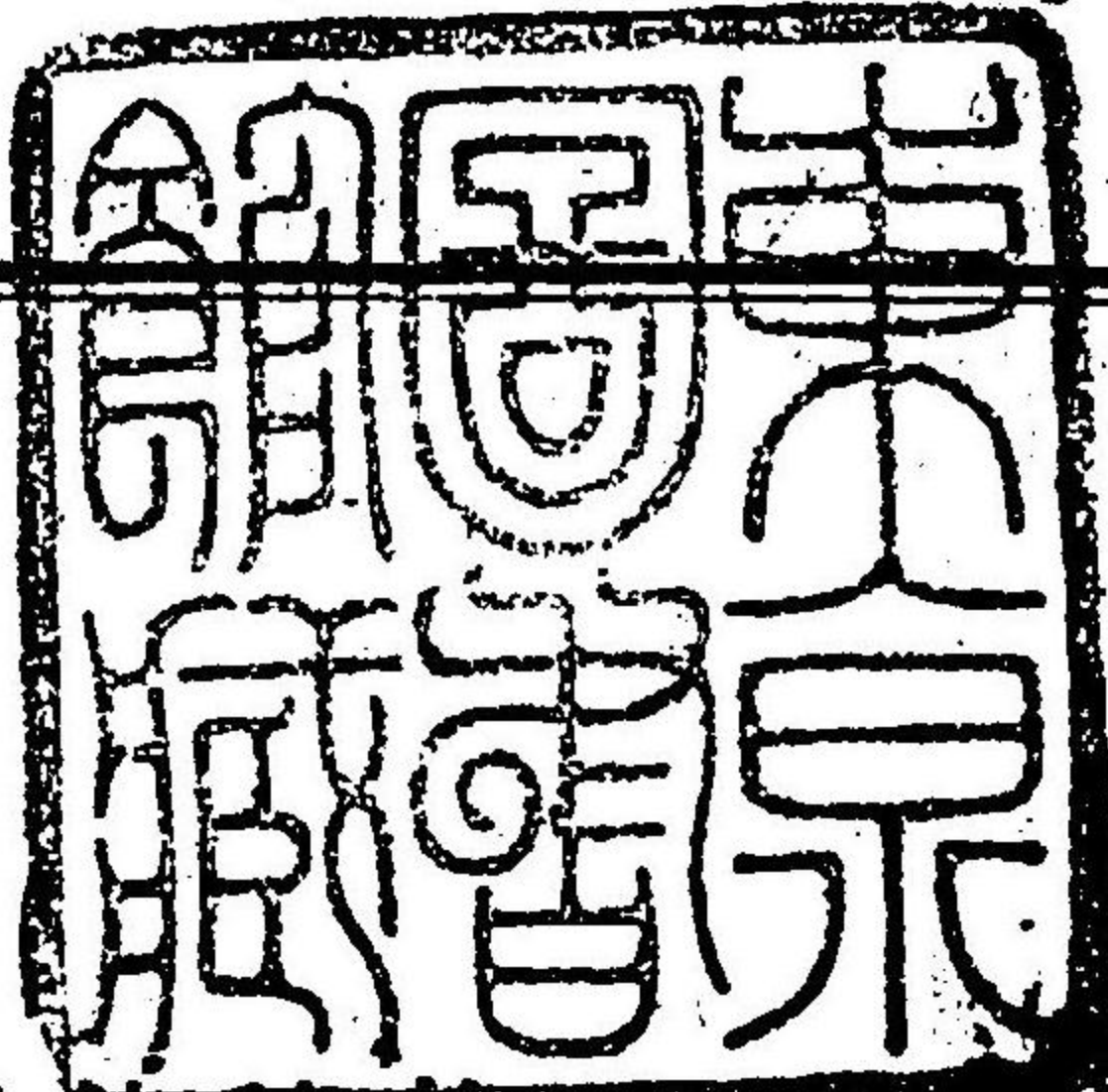


大和田建樹編
謡曲通解

第五卷





諸曲通解第五卷目次

三	輪	一
鳩	七	丁
芭蕉	十	丁
草紙洗小町	二	丁
烏帽子折	三	丁
日髭	四	丁
三笑	四	丁
竹雪	四	丁
炊拾	五	丁
絃上	五	丁
弓八幡	六	丁
項羽	六	丁
源氏供養	七	丁
錦木	八	丁
	八	丁
	九	丁
	十	丁
	十一	丁
	十二	丁
	十三	丁
	十四	丁
	十五	丁
	十六	丁
	十七	丁
	十八	丁
	十九	丁
	二十	丁



兼テ御承知置可被下候也

一、候下候等ノ爲メニ、各卷ノ目次ニ、

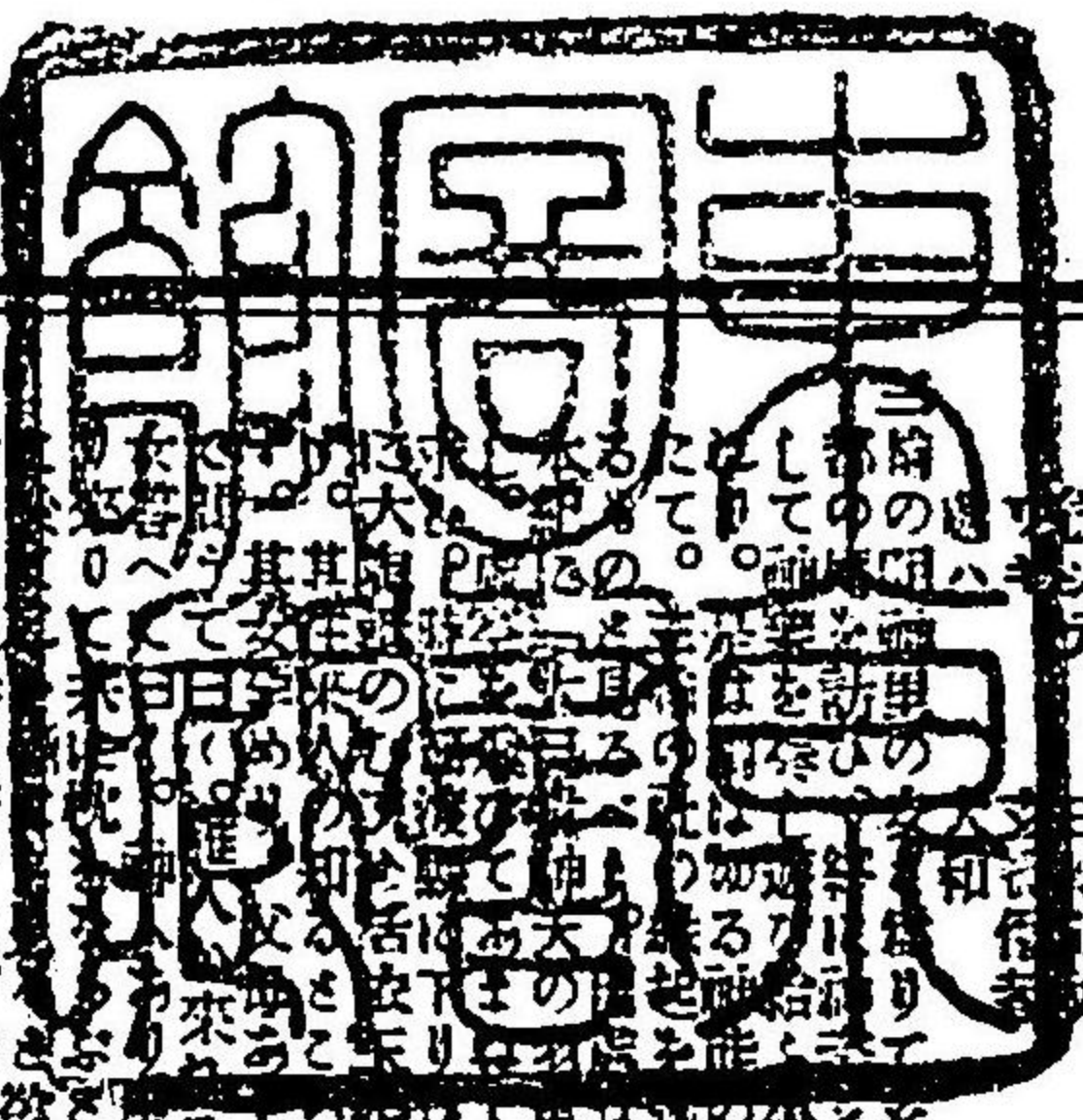
相付テ、御承知置可被下候也。

兼テ、御承知置可被下候也。

大會	百二丁
皇帝	百六丁
春榮	百十一丁
籠太鼓	百二十四丁
一角仙人	百三十丁
自然居士	百三十五丁
放生川	百四十六丁
生田敦盛	百五十二丁
胡蝶	百五十八丁
柏崎	百六十四丁
通小町	百七十四丁
當麻	百七十九丁
調伏會我	百八十六丁
元服會我	百九十二丁
合浦	二百一丁

謠曲通解第五卷

大和田建樹 編



前シテ 三輪の山陰に住居する。玄賓と申す沙門にて候ふ。扱も此程何處ともなく女性一人。毎日檜隈の水を汲みて來り候ふ。今日も來りて候はゞ。如何なる者かと名を尋ねばやと思ひ候ふ。

シテ次第 三輪の山本道もなし。檜原の奥を尋ねん。實にや老少不定とて。世の中々に身は残り。幾春秋をか送りし。あこまじや成す事なくて徒に。憂き年月を三輪の里に。住居する女にて候ふ。又此山陰に玄賓僧都とて。貴き人の御入り候ふ程

三輪みわ

元清作

芭蕉の積芭蕉の積は唐土楚國の傍唐土楚國の傍小水と申す所小水と申す所に山居する僧に山居する僧にて候ふ。
 我法華持經の身なれば我法華持經の身なれば。日夜朝暮彼御經を讀み奉り候ふ。
 殊更今は秋も半殊更今は秋も半。月の夜すがら忘る事なし。こゝに不思議なる
 事の候ふ。此山中に我ならず此山中に我ならず。又住む者もなく候ふに。夜なく
 讀經の折節讀經の折節。菴室のあたり菴室のあたりに人の音なひ聞こえ候ふ。今夜も來
 りて候はら。如何なる者如何なる者と名を尋ねばやと思ひ候ふ。サシ「既
 に夕陽西にうつり。山峽の影冷ましくして。鳥の聲幽かに物凄
 き。歌」夕べの空もほのくぐと。月になり行く山陰の。寂寞とあ
 る柴の戸に。此御經を讀誦する。
 シテ次第「芭蕉に落ちて松の聲。あだにや風の破るらん。サシ」風破
 窓を射て燈さえ易く。月疎屋を穿ちて夢なり難き。秋の夜すが

芭蕉

ばせう 氏信作

ら所から。物冷ましき山陰に。住むとも誰か白露の。舊り行く
 末多哀れなる。歌「あはれ馴るゝも山賤の。友こそ岩木なりけれ。
 見ぬ色の。深きや法の花心。染めすはいかゞ徒らに。其唐衣の
 錦にも。衣の珠はよも掛けじ。草の袂も露涙。移るも過ぐる年
 月は。廻り廻れどうたかたの。哀れ昔の秋もなし。
 ワキ詞「扱も我讀誦の聲息らす。夢現とも分かざるに。女人の月
 に見え給ふは。如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是は此あ九
 りに住む者なるが。さも逢ひ難き御法を得。花を捧げ禮をなす。
 結縁をなすばかりなり。とても姿を見え参らすれば。何をか今
 は憚りの。言の葉草の菴の内を。露の間なりと法の爲めは。結
 縁に借させ給へとよ。ワキ「實にく法の結縁は。誠に妙なる御
 事なれどもさりながら。なべてならざる女人の御身に。いかで
 御宿を参らすべき。シテ「其御心得はさる事なれども。よそ人な

芭蕉の積芭蕉の積は唐土楚國の傍唐土楚國の傍小水と申す所小水と申す所に山居する僧に山居する僧にて候ふ。
 我法華持經の身なれば我法華持經の身なれば。日夜朝暮彼御經を讀み奉り候ふ。
 殊更今は秋も半殊更今は秋も半。月の夜すがら忘る事なし。こゝに不思議なる
 事の候ふ。此山中に我ならず此山中に我ならず。又住む者もなく候ふに。夜なく
 讀經の折節讀經の折節。菴室のあたり菴室のあたりに人の音なひ聞こえ候ふ。今夜も來
 りて候はら。如何なる者如何なる者と名を尋ねばやと思ひ候ふ。サシ「既
 に夕陽西にうつり。山峽の影冷ましくして。鳥の聲幽かに物凄
 き。歌」夕べの空もほのくぐと。月になり行く山陰の。寂寞とあ
 る柴の戸に。此御經を讀誦する。
 シテ次第「芭蕉に落ちて松の聲。あだにや風の破るらん。サシ」風破
 窓を射て燈さえ易く。月疎屋を穿ちて夢なり難き。秋の夜すが

ら所から。物冷ましき山陰に。住むとも誰か白露の。舊り行く
 末多哀れなる。歌「あはれ馴るゝも山賤の。友こそ岩木なりけれ。
 見ぬ色の。深きや法の花心。染めすはいかゞ徒らに。其唐衣の
 錦にも。衣の珠はよも掛けじ。草の袂も露涙。移るも過ぐる年
 月は。廻り廻れどうたかたの。哀れ昔の秋もなし。
 ワキ詞「扱も我讀誦の聲息らす。夢現とも分かざるに。女人の月
 に見え給ふは。如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是は此あ九
 りに住む者なるが。さも逢ひ難き御法を得。花を捧げ禮をなす。
 結縁をなすばかりなり。とても姿を見え参らすれば。何をか今
 は憚りの。言の葉草の菴の内を。露の間なりと法の爲めは。結
 縁に借させ給へとよ。ワキ「實にく法の結縁は。誠に妙なる御
 事なれどもさりながら。なべてならざる女人の御身に。いかで
 御宿を参らすべき。シテ「其御心得はさる事なれども。よそ人な

いつはれる姿の 女に化して来
るを見えは云ふ。芭蕉の本体を多
くはしてはの意。初夜の鐘聲は諸行
無常と響くよしに云へり。三井
寺に寄しく見ゆ。無常の文字の
如く形の備えたるに於けて云ふ
月も妙なる法の場 妙法の文字
を隠したり。風は芭蕉
の上を吹き傳ふらん 風は芭蕉
さびしき様なり。

うどんげの 三千年に一度花さ
くは佛法にて云ふ事。上人の所
ちひを得る事の稀なるを譬へて
云へり。人間の衣服を着て身
を装ふ事。うづり来ぬれど 人間の姿にう
づり来ぬれど 影の如くうづり来
ぬれど 庭の面と云ふに同じ
細なき刺なれば庭の面は「まど
と改めたし。松の根を枕にする
枕ともなきまどろみたるの意。
あらはれいづる 松の根の土よ
り上にあらはれたる意に於けて
云ふ。

常と爲りにけり。

ワキ詞「扱は雪の中の芭蕉の。儂れる姿と聞てえしは。疑ひもなき
芭蕉の女と。現はれけるこそ不思議なれ。唯是れ法の奇特
と。思へばいと夜もすがら。月も妙なる法の場。風の芭蕉や
つたふらん。

後シテ「あら物すこの庭の面やな。有り難や妙なる法の教へには。
逢ふ事まれなる優曇華の。花待ち得たる芭蕉葉の。御法の雨も
豊かなる。露の恵みを受くる身の。人衣の姿御覽せよ。かばか
りは。うづり来ぬれど花もなき。地「芭蕉の露の舊りまごる。
シテ「庭のもせ。山影のみぞ。

ワキ「寐られねば。枕ともなき松が根の。現はれ出づる姿を見れ
ば。有りつる女人の顔ばせなり。さもあれ御身は如何なる人ぞ。
シテ詞「いや人とは耻づかしや。誠は我は非情の精。芭蕉の女と

何か定めは 女人なるまじき
多しかなの 土の枕詞。

さなきだにあたなるに 女なら
ば。万物を不滅ならぬに
「あだなる」は移りかへり
まじきを云ふ。緑の葉を云ふ。葉の
花染ならぬに 香花にて染め
る衣は。色のさぬ易きもの故に
云ふ。花染より芭蕉の衣の方
がまだあだならぬなり。
袖のほころびも 後に「芭蕉は
破れて」と云はんために先づ此
詞を置く。
無相無心の所が
無相無心の体 無相無心の所が
一塵法界の云々 塵一本の中に
も佛法世界ありて佛の住むを云
ふ。うれが雨となり露となり露
露となりて形はかれど同じ佛
体なり。
一枝の花を捧げ 草木に花咲く
を佛に供する意に見なして云ふ
一花開けて四方の春 釋尊出で
て世界の衆生を教化したる時
近レ水邊先づ月を向レ花水
易レ爲レ香 宋の扇の詩。水
邊の露は物なれば月が早く

現はれたり。ワキ「うもや芭蕉の女ととは。何の縁にかかゝる女
体の。身をば受けさせ給ふらん。シテ詞「其御不審は御あやまり。
何か定めはあらかねの。ワキ「土も草木も天より下る。シテ「雨露
の恵みを受けながら。ワキ「我とは知らぬ有情非情も。シテ「おの
づからなる姿となりて。ワキ「さも愚かなる。シテ「女とて。地「さ
なきだに。あだなるに芭蕉の。女の衣は薄色の。花染ならぬに。
袖のほころびも耻づかしや。

地ク「夫れ非情草木といつば。誠は無相真如の体。一塵法界の
心地の上。雨露霜雪の形を見ず。シテ「然るに一枝の花を捧
げ。地「御法の色を顯はすや。一花開けて四方の春。長閑けき空
の日影を得て。楊梅桃李數々の。シテ「色香に染める心まで。地

「諸法實相隔てもなし。クセ「水に近き樓臺は。先づ月を得るなり。
陽に向へる花木は又。春に逢ふ事易きなる。其理も様々の。實

既に衣通姫云々 允恭天皇の御
紀に於て歌の名人なり。神とあり
はれて歌道を守り給ふ事とあり
垂るると云ふ。玉津島明神は紀
州和歌の浦にありて衣通姫を祭
れるなり。すなはち和歌三神の
一ツ。

古今 古今集の事。醍醐天皇の
延喜年中に成れり。但し物語と
萬葉集の事。但し物語と
云へるは誤なり。但し物語と
動詞。勅命によつて撰びたる歌
集の事。私に撰びたる歌人一衆
の歌集。

奈良の天子の御宇 大和の奈良に
遷都せられたり。元正。元正の御宇
代を云ふ。神代。元正の御宇
神代を云ふ。井手左大臣と云ふ。
神代元年七十四にて薨せられたり
人。

衣通姫の流れば云々 古今集の
衣通姫の流れば云々。古今集の
衣通姫の流れば云々。古今集の
衣通姫の流れば云々。古今集の
衣通姫の流れば云々。古今集の

ふ。王「如何に小町。なにとて古歌をば申すや。シテ」愧づかし
の勅託やな。先代の昔はそも知らず。既に衣通姫此道の拾たらし
ん事をなげき。和歌の浦わに跡を垂れ給ひ。玉津島の明神より
このかた。皆此道を嗜なむなり。それ今この歌を古歌と仰せ候
ふは。古今萬葉の勅撰にて候ふか。又は家の集にて有るやらん。
作者は誰にてましますや。委しく仰せ候へ。ワキ「仰せの如く其
證歌分明ならではいかでか奏し申すべき。草紙は萬葉題は夏。
水邊の草とは見えなれども。讀人しらすと書きたれば。作者は
誰とも存せぬなり。シテ」夫れ萬葉は奈良の天子の御宇。撰者は
橋の諸兄。歌の数は七千首に及んで。皆妾が知らぬ歌はさむら
はず。萬葉といふ草紙に數多の本の候ふか覺束なうこそ候へ。
ワキ「げにくうればさる事なれどもさりながら。御身は衣通姫
の流なれば。あはれむ歌にて強からねば。古歌を盛むは道理な

源九大夫の流れ 同書源文の序
之に云ふ。源九大夫。源九大夫
源九大夫の流れ。源九大夫の流
源九大夫の流れ。源九大夫の流
源九大夫の流れ。源九大夫の流
源九大夫の流れ。源九大夫の流

り。シテ「さてはおことはいにしへの猿丸大夫の流れ。それは猿
猴の名を以て。我名をよろに立てんとや。正しく是は古歌なら
ず。ワキ「花の陰ゆく山賤の。シテ」其さまいやしき身ならねば。
何とて古歌とは見るべきや。ワキ「さて詞をたゞとて誤りしは。
富士のなるさの大將や。四病八病三代八部同じ文字。シテ」文字
もかほどの誤りは。ワキ「昔も今も。シテ」有りぬべし。地「不思議
や上古も末代も。三十一字の其内に。一字もかはらで讀みたる
歌。是れ萬葉の歌ならば。和歌の不思議と思ふべし。さらば證
歌を出だせとの。宣旨度を下りしかば。初めは立春の題なれば。
花も盡きぬと引き開く。夏は涼しき浮草の。是こそ今の歌なり
とて。既に讀まんどさし上ぐれば。我身にあらぬ歌人さへ。
胸に苦しき手を置けり。ましてや小町が心の内。たゞとらうき
の橋うち渡りて。あやふき心は隙もなし。

明日折りて。鳥帽子を折る事
折ると云ふ。故に鳥帽子の事
を鳥帽子折と云ふなり。此の
名は之に依る。

何れ。平家より鳥帽子の大小を
分る。一書二書三書などの名
あり。鳥帽子の頂を左の方折
りて。例に依りて作れるもの。家々の古
例に依りて左折を用ふるも右折
を用ふるもあり。源氏の左折
家ハ右なり。

如き人の云々。幼少の人なれば
平家より答めもあるまじと云
ふ。

やつして下らばやと思ひ候ふ。

牛若「如何に此内へ案内申し候ふ。シテ誰にて渡り候ふや。」

牛若「鳥帽子の所望に参りて候ふ。シテ何と鳥帽子の御所望と候

ふや。夜中の事にて候ふ程に。明日折りて参らせうするにて候

ふ。牛若「急ぎの旅にて候ふ程に。今宵折りて賜はり候へ。シテ

「さらば折りて参らせうするにて候ふ。先づ此方へ御入り候へ。

扱鳥帽子は何番に折り候ふべき。牛若「三番の左折に折りて賜は

り候へ。シテ「是は仰せにて候へども。それは源家の時にてこそ。

今は平家一統の世にて候ふ程に。左折は思ひもよらぬ事にて候

ふ。牛若「仰せは尤にて候へども。思ふ子細の候ふ間。唯折りて

賜はり候へ。シテ「幼き人の御事にて候ふ程に。折りて参らせう

するにて候ふ。此左折の鳥帽子に付いて。嘉例目出度き物語の

候ふ語つて聞かせ申さうするにて候ふ。牛若「さらば御物語り候

又、其の云々。此物語の聞ふる鳥
帽子を折りし。とあると知る人
三條鳥丸。京都の町の名。鳥帽
子折などのやうなる商人の住む

君ふ御出仕。内侍の取。
御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。
御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。

程なく御代。御代。御代。御代。御代。
御代。御代。御代。御代。御代。

御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。
御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。

御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。
御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。

御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。
御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。御出仕。

へ。シテ「扱も某が先祖にて候ふ者は。もとは三條鳥丸に候ひし

よな。いで其頃は八幡太郎義家。安倍の貞任宗任を御追討あつ

て。程なく都に御上洛あり。某が先祖にて候ふ者に。此左折の

鳥帽子を折らせられ。君に御出仕有りし時。帝なりのめし思し召

され。其時の御恩賞に。奥陸奥の國を賜はつて候ふ。我等もま

た其如く。嘉例目出度き鳥帽子折にて候へば。此鳥帽子を召さ

れて程なく御代に。出羽の國の守か。陸奥の國の守にか。なら

せ給はん御報有つて。世に出で給はん時。祝言申し、鳥帽子

折と。召されて目出たう。引出物たばせ給へや。あはれ何事も。

昔なりけり御鳥帽子折の。左折の其盛。源平兩家の繁昌。花な

らば梅と櫻木。四季ならば春秋。月雪の詠め何れやと。争ひし

にやいつの間。保元の其以後は。平家一統の。代となりぬる

う悲しき。よしうれとても報いあらば。世替はり時來り。折知

牛若を見てまた遠くも行く
と云ふ程の事。

行くへも知らぬ。
素性も知らぬ

御目の程の
目まきの早さを感

影うつる
月影のうつる事を感
ふ云ひか。

旅を飾磨の云々
播磨の飾磨郡
は云ひかけたり。
時勢も依りて策
枯を思ふするの意。

も渡り候へ。や。いまだ是に御座候ふよ。是に女の候ふが。此
御腰の物を見知りたる由申し候ふ程に。召し上げられて賜はり
候へ。牛若「不思議やな行くへも知らぬ田舎人の。我に情の深き
や。二人人違へならば御ゆるしあれ。鞍馬の少人牛若若と。
見奉りて候ふなり。牛若「實に今思ひ出だしたり。若し正清がゆ
かりの者か。ツト「御目の程の賢さよ。妾は鎌田が妹に。牛若あ
こやの前か。ツト「さん候ふ。牛若「實に知るは理我ころは。身
のなる果の牛若丸。人がひもなき今の身を。語れば主従と。知
らるゝ事不思議なる。

ロンキ地「はや東雲も明け行けば。月も名残の影うつる。鏡の宿
を立ち出づる。二人「痛はしの御事や。さしも名高き御身の。商
人と件なひて。旅を飾磨の徒歩跣足。目もあてられぬ御風情。
牛若「時代に替はる習ひとて。世の爲め身をば捨衣。恨みと更に

しひて参らせ
牛若の辭するふ
こゝろに刀を返上
せしなり。牛若の詞。

「はなれ」
「はなれ」
「はなれ」

思はじ。シテ「東路の御はなむけど。思し召され候へとて。此
御腰の物を。しひて参らせ上げければ。力なしとて請け取り。
我若しも世に出づならば。思ひ知るべしとらばとて。商人と件
なひ憂き旅に。やつれはてたる美濃の國。赤坂の宿に着きにけ
り。

ワキ「急ぎ候ふ程に。赤坂の宿に着きて候ふ。如何に吉六。此
所に宿を取り候へ。吉六「畏つて候ふ。ワキ「是は何と仕り候ふべ
き。吉六「我等も是非を辨へず候ふ。牛若「面々は何事を仰せ候ふ
や。ワキ「さん候ふ我等此所に泊り候ふを。此あたりの悪黨ども
聞き付け。今夜夜討に討たうする由申し候ふ程に。左様の談合
仕り候ふ。牛若「縦ひ大勢ありとて。表に進む兵を五十騎はか
り切り伏すならば。やはか引かぬ事は候ふまじ。ワキ「是は頼も
しき事を仰せ候ふ物かな。悉皆頼み候ふ。牛若「面々は物具して

駿馬山 駿馬山に於ての家。

「あつはし衣の... 雲ひかけて... 味を... 神つ白波の... 密せかけて打つ白波の... 入る勢を... 我の如き... 追手がくわつと開けたる... 門を... 内... 手... の...」

「松明の影より... 松明を投げ... 例の小男... 例の小男... 例の小男...」

三十八 博文館

待ち給へ。我は追手に向ふべしと。夕へも過ぎて駿馬山。年月習ひし兵法の。術を今ころは。頭はし衣の妻戸を開きて。沖つ白波の。打ち入るを遅しと待ち居たり。ツレ一「寄せかけて。打つ白波の音高く。関をつくつて騒ぎけり。シテ「如何に若者ども。ツレ「御得候ふ。シテ「追手がくわつと開けたるは。内の風ばし早いか。ツレ「さん候ふ内の風早くして。或は討たれ。又は重手負ひたると申し候ふ。シテ「不思議やな内には吉次兄弟ならでは有るまじきが。扱何者かある。ツレ「投松明の影より見候へば。年の程十二三ばかりなる幼き者。小太刀にて切つて廻り候ふは。さながら蝶鳥の如くなる由申し候ふ。シテ「扱摺針太郎兄弟は。ツレ「是は火振の親方として。一番に切つて入りしを。例の小男渡り合ひ。兄弟の者の細首を。唯一打に打ち落したる由申し候ふ。シテ「はいく何とく。彼者

松明の占手 松明を投げて今夜の勝負如何と占す事。一の松明 一番に投げ入れたるを云ふ。二番三番も同じ。

扱よな 扱ひ負ふ處つたるよの意。

兄弟は。餘の者五十騎百騎には増さうするものを。あゝ切つたりく彼奴は曲者よ。ツレ「高瀬の四郎は之を見て。今夜の夜討悪しかりなるとや思ひけん。手勢七十騎にて引いて歸りて候ふ。シテ「さやつは今に始めぬ臆病者。扱松明の占手は如何に。ツレ「一の松明は切つて落し。二の松明は踏み消し。三は取つて投げ歸して候ふが。三つが三つながら消れて候ふ。シテ「うれこそ大事よ。夫れ松明の占手といつば。一の松明は軍神。二の松明は時の運。三は我等の命なるに。三つが三つながら消ゆるならば。今夜の夜討は扱よな。ツレ「御説の如く。此まゝにては鬼神にてもたまるまじく候ふ。唯引いて御歸り候へ。シテ「實にく盗も命の有りにて候。いさ引いて歸らう。ツレ「尤にて候ふ。シテ「いや熊坂の長範が。今夜の夜討を仕損じて。何處に面を向くべきぞ。唯攻め入れや若者どもと。大音あげて呼はりけり。地

あらかはかぐしや 又牛若の心

大鳥ゆき 大足ふるるく事。

あらかはかぐしや 又牛若の心
あはれなる 見苦しき云云
さそくをつかつて 左足を使つ
てにや。又早急を使つてみや。
十方切 八方拂 腰車 破城の返
の命がみ 紅葉重花重 三
つ頭より火を出す 秘術を盡す
しので 刃と背との間にある高
き釘を云ふ。之を互に削り合ふ
秘術を盡すなり。

「関をつくつて切つて入りけり。
地」あらかはかぐしやおのれ等よ。先に手並は知りつらん。うれにも
こりず打ち入るか。八幡も御知見あれ。一人も助けてやらし物
をと。小口に立つて待つちかけたる。

地「熊坂の長範六十三。今宵最後の夜討せんと。鐵屐をふんぬき
捨て。五尺三寸の大太刀を。するりと抜いて打ちかたげ。大鳥
歩みにゆらりくと。歩み出でたる有様は。如何なる天寃鬼神
も。面を向くべき様なき。

あらかはかぐしや盗人よ。めだれ顔なる夜討はするとも。我に
は叶はし物をとて。透間あらせす切つてかゝる。熊坂も大太刀
使の曲者なれば。さうくをつかつて十方切。八方拂や腰車。破
城の返し風まくり。劍降らしや獅子の齒がみ。紅葉重花重。三
つ頭より火を出だして。しのきを削つて戦ひしが。秘術を盡す

御曹司 牛若の事。
大太刀 自分の方より打ち出す
刀を失せて。唯打ち込まる。太
刀を防ぐ一方ふりたるを云
ふ。
打物業 太刀合はせの事。
背けて やりすこして背面の方
背ける。 両膝を云ふ。

一人と見えつる云々 かしらだ
一人と見えつる云々。まやれ
て云へるなり。

前シテ 源夫
ツレテ 白髭明神
後シテ 近江
ワキ 近江
江州比良山の麓なる白髭明神の結
起を作れり。クニよりクニまで
の。太平記の文を本としてつ
けたり。
君と神との道すも 新千歳集
御守國夏の歌に「忘たり新
も御代の為めなれ」君と神との
身につかへつ。とあるをよ
白髭の明神 滋賀郡打下(今)
の(今)と云ふ處にあり。祭神
ハ源田命。滋賀の名所。
花園

大太刀も。御曹司の小太刀に切り立てられ。請太刀になつてぞ
見にたりける。
地「打物業にて叶ふまじ。組んで力の勝負せんとて。太刀投げ捨
て。大手を廣げて飛んでかゝるを。背けて諸膝雑さ給へば。
切られてかつばと轉びけるが。起き上らんとてつゝ立つ所を。
眞向よりも割りつけられて。一人と見えつる熊坂の長範も。二
つに爲つて失せにける。

白髭

清次作

ワキ次第 君と神との道直に。治まる國久しき。詞「うもく是
は當今に仕へ奉る臣下なり。扱も江州白髭の明神は靈神にて御
座候ふ。君此程不思議の御靈夢の御告げましますにより。急ぎ
參詣申せとの宣言を蒙り。唯今白髭の明神に勅使に參詣仕り候

志賀の山越。京極白河の方より
 真野の入江。湖水近傍の各所。
 瑞垣の浦。琵琶湖の事を瑞垣の浦と
 云ふ。
 さえかへり。春ふりて又寒氣
 ふかへる事。餘寒みて雪の散
 たるのみならず。波も雪のやうに
 白く立つとの意ふかたり。舟の
 波り兼ねたる。舟ふて海を渡る
 と。世の中を渡りゆくとの困難
 を兼て云ふ。
 風歸帆を送る云々。風送。歸帆。一
 萬里程。江天渺々水光平。舟子
 歸。是明朝。と云ふ詩の句なる
 ありし句。夫木抄ふ「吹き
 さらす嵐もふは山高み開れぬ
 雲井や都なるらん」とあり。
 花さそよ比良の山風吹きふけりて
 舟の跡見ゆる(とて)新古今
 今集宮内卿の歌なり。水上の花
 の散り押きたるをみゆ。舟の過
 りゆくだけいぢるしく跡が
 見ゆるの意。
 天つ雁云々。千重。千重。千重の歌み
 「天つ雁ひとつ見ゆる」とあり
 の波を分けても歸る雁金」とあり
 の。海も空も一つ色み見ゆると
 ころを雁のゆくけしきなり。三
 名。三越加賀能登の邊を云へる古
 名。

ふ。道行九重の。空も長開けき春の色。霞む行くへは花園の。
 志賀の山越うち過ぎて。真野の入江の道すがら。鳩の浦風さえ
 かへり。立ち寄る波も白髭の。宮居に早く着きにけり。
 シテツレ一聲。釣のいとなみいつまでか。隙も波間に明け暮れん。
 ツレ。棹さしたる、海士小舟。二人。渡り兼ねたる浮世かな。シテヤシ
 「風歸帆を送る萬里の程。江天渺々として水光平らかなり。二人
 「舟子は解く是れ明朝の雨。面白や傾しも今は春の空。霞の衣ほ
 ころびて。峯白妙に咲く花の。嵐も匂ふ日影か。賤しき海
 士の心まで。春ころ長閑けかりけれ。花誘ふ。比良の山風吹き
 けけり。漕ぎ行く舟の跡見ゆる。鳩の浦も遙々と。霞み渡り
 て天つ雁。歸る越路の山までも。詠めに續く氣色かな。
 ワキ詞「如何に是なる翁。汝は此浦の者か。シテ詞「さん候ふ此浦の
 漁夫にて候ふが。朝なく沖に出で釣を垂れ候ふ。先づ御姿を

瑞垣の。「久しき」の枕詞なる
 せり。こゝに直久しき」の意と
 此國の起り。我日本の開闢を云
 ぶ。是より太平記の文句。國史の
 家々傳へる所。國史の人の
 の家々傳へたるものなれ
 ば云ふ。
 是はち歸する所の云々。異同
 兼々なれど結局一様を歸する

見奉れば。此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり。もし都より
 の御參詣にて御座候ふか。ワキ「實によく見て有る物かな。是は
 當今に仕へ奉る臣下なるが。君此程不思議の御靈夢の御告げま
 しますにより。勅使に參詣申して候ふ。シテ「有り難や君として
 だにかほほどまで。敬ひ給ふ御神の。御威光の程こそ有り難けれ。
 二人「賤しき海士の此身までも。直なる御代に近江の海の。深き恵み
 を頼むなり。ワキ「實に誰とても君を仰ぎ。神を敬ふ心あらば。
 などか恵みにあづからざらん。シテ「殊更こゝは。ワキ「所から。
 地「瑞垣の。年も經にけり白髭の。神の誓ひは今とても。變はら
 ざりけり。實に有り難や頼もしや。我は心も波小舟。釣の翁の
 身ながらも。安く樂しむ此時に。生まれあふ身は有り難や。
 地「夫れ此國の起り。家々に傳はる所おのく別にして。其
 説まちくなりといへどもまばらしく歸する所の一義に依らば。

西に傾く... 濁明詞... 如何に此草庵に惠遠禪師の渡り候ふか。陶淵明陸修靜是

三笑

さんせう

作者不詳

シテサシ「晋の惠遠廬山の下に居して。三十餘年廬山を出でず。白蓮社を結びならびに十八の賢あり。其外數百人世を捨て榮を捨てて。共ニ西方を誦し六字を體して此草庵に遊止す。地かくて流れを枕とし岩に口を漱きて。行住座臥の行ひに。座禪の床を洩る月も。西に傾くをりふしは。洞煙谷雲の内よりも。瀑布の瀧の白妙に。あけぼの、山の姿。たどへん方をなかりける。ツレ二人一聲「雪無心にして以て岫を出で。鳥飛ぶが如くに倦んで。還る事をや知らずらん。暁もはや。霜降月の晴に。野山の草の色もはや。散る紅葉はにうつろひて。枯野になれど白菊の。花はさながら紅の。やしほに見ゆるけしきかな。濁明詞「如何に此草庵に惠遠禪師の渡り候ふか。陶淵明陸修靜是

白布... 濁明詞... 如何に此草庵に惠遠禪師の渡り候ふか。陶淵明陸修靜是

萬仞名を得て... 濁明詞... 如何に此草庵に惠遠禪師の渡り候ふか。陶淵明陸修靜是

まで参りて候ふ。シテ詞「其時禪師は白蓮社を出で。書を以て淵明を招きければ。ツレ二人「二人は共ニ拜をなし。地「廬山のさかしき石橋を。心しづかに渡りつゝ。巖に腰をかけ。瀑布を詠め給へり。三千世界は眼に盡き。十二因縁は心の中に際もなし。濁明詞「如何に惠遠禪師に申すべき事の候ふ。シテ詞「何事にて候ふぞ。濁明詞「如何に廬山に至らざらん者は。是れ僧にあらすと申し候ふよのう。シテ詞「實にく左様に申し候ふ。濁明詞「扱々瀑布と云ふ事は。如何なる謂のあるやらん。シテ詞「いやく異なる事はなし。萬仞名を得て瀑布といふ。日香爐を照らして紫煙をなす。シテ詞「遠く見れば織るが如くにして天台に掛く。寶尺を疑ふ事をやめよ度りがたし。シテ詞「たゞちち金刀の剪裁し易きを恐る。傾き來つて石上に春雷をなす。濁明詞「知らんと欲す是銀河の水なる事を。シテ詞「人間に墮落して。壁合して。却つて。廻る。

一節相續 父のまじを頼る事。又始めて妻をかたり候ふ。新ふ御母を頼る事。

難儀を語り云々 遠方の風音をなごに遠夜せんために出立する事云々。

四壁の竹 家の四方を圍み生ひたる竹云々。

あら今めかしき 今更四せられ

をば長松の母に添へ置き。弟月若をば。某一跡相續のため。此屋の内に置きて候ふ。かやうに候ふ處に。又始めて妻をかたらしめて候ふ。此間宿願の事候ひて。いさゝか程遠き所に參籠仕り候ふ間。月若が事をくはしく申し置かばやと存じ候ふ。如何に渡り候ふか。狂言「何事にて候ふぞ。ワキ」さん候ふ唯今呼び出だし申す事餘の儀にあらす。某はさる宿願の子細候ひて。二三日の間物詣仕り候ふ。其留守の内月若をよく痛はりて賜はり候へ。又此國は雪深き所にて候ふ。降り積り候へば四壁の竹の損じ候ふ。殊に此程は何とやらん雪氣になりて候ふ間。自然雪降り候はゞ。召し使ひ候ふ者どもに仰せ付けられ候ひて。あたりの竹の雪を拂はせられ候へ。狂言「何と御物詣と候ふや。めでたうやがて御下向候へ。又竹の雪の事は心得申し候ふ。又月若殿の事よく痛はれと仰せられ候ふ。あら今めかしや候

何方への御留守にても云々 母見の口氣を頼り候ておな

果報なきもの 不幸なるものに同じ。

はらうの森 山城の名所。秋の末ふなりてははらう(木の名)の散る事ふかけて云々。陰と頼むかたなく散るの意。實は父母の頼みおひなき心細さを比したるなり。

柴の扉のあけくれ 柴にて作れる門の戸をあける事。日の明露にかけて云々。

ふ。何方への御留守にてもよく痛はらぬ事の候ふか。ワキ「いや幼き者の事にて候ふ程にかやうに申し候ふ。さらばやがて下向申さうするにて候ふ。狂言「如何に月若。父御は物詣とて御出で候ふ。御留守の間月若をよく痛はれと仰せ置かれて候ふ。是は今めかしき事を仰せ候ふ。いかさまおことは殿へ妾が悪くあたるなど告口をして有るな。あらしくや腹立や。子「實に世の中に月若程。果報なき者よもあらじ。あけくれ思ひを信濃なる秩父の山。秋はてぬればは、その森の。頼む方なくなり果てぬ。たゞ長松におはします。母と姉御に暇を乞ひ。何方へも行かばやと思ひ候ふ。シテサシ「此程は松吹く風も淋しくて。伴なふ物は月の影。人も訪ひてぬ隠れがの。柴の扉のあけくれは。いつまで誰を長松の。

思ひの長松の
情を受け。物思する目には長
く迷ふべしとの言ふかけたり。
入らんとすれば門をさす
かためて入れぬなり。

事の外雪降りて候ふ程に。急いで竹の雪を拂ひ候へ。物を脱ぎ
小袖一つにて拂ひ候へ。子とては拂はでかくて有るならば
地拂はでかくて有るならば。我のみならず母上も。姉御前も思
ひは長松の風。身にしむばかり更くる夜の。雪とむうして拂ひ
かね。歸らんとすれば門をさす。明けよとたけど音もせず。
あら寒や堪へがたや。月若たすけよ。實にや無常のあらき風。
憂き身ばかりつらさかなと。思ふかひなき月若は。終に空しく
なりにけり。

狂言男「何と申すぞ。月若殿雪に埋れて空しくなり給ひたると申
すかあら。痛はしの御事や候ふ。そこそ長松に御座候ふ母御の
御歎き候はんすらん。やがて此由を長松へ申し候ふべし。いか
に申し候ふ。月若殿竹の雪に埋れて空しく御なり候ふ。
シテヒメ「實よく生を受くるたぐひ。誰か別れを悲しまさる。

大聖釋尊も在俗の時
佛も凡夫も同じ事なりと云
法王子と云ふ人田舎に
太子と云ふ人田舎に
法王子と云ふ人田舎に
太子と云ふ人田舎に
法王子と云ふ人田舎に
太子と云ふ人田舎に

よるふかへらぬの雪の降るを古
花の根に鳥は古巢にかへれども。
引れを知る人なりと云ふ。
我が再び此道に。又父の家
片系は片系の雪を呼びけり。
片系は片系の雪を呼びけり。
片系は片系の雪を呼びけり。
片系は片系の雪を呼びけり。
片系は片系の雪を呼びけり。

されば大聖釋尊も。羅睺爲長子と説き。又西方極樂の教主法藏
比丘は。御子の太子を悲しみ。鹿野苑に迷はせ給ふところ承り
て候へ。況んや人間に於てをや。誰かは子を思はざる。二人次第
「ふるに思ひの積る雪。消はし我子を尋ねん。
二人一母「子を思ふ身を白雪の振舞は。ヒメ「ふるにかへらぬ心か
な。シテ「花は根に鳥は古巢にかへれども。ヒメ「我は再び此道に。
二人「歸らん事も片系の。一筋にたゞ思ひきり。念れて年を降る
雪の。積りの恨み深ければ。行く水に敷ならぬ。身は有明の月
若が。たゞかきくれて五障の雪のひまよりも。あくがれ出づる
はかなさよ。シテ「うへなき思ひは富士の嶺の。二人「かくれぬ雪
どもあらはれなば。地「愧づかしや何處へやり。身は小車の我妻
地「習はぬ業を管養は。寒風もたまらず。いつを吳山にあらねど
も。笠の雪の重さよ。老の白髪となりやせん。戴く雪を拂はん。

先づ笠の雪を拂はん。シテ「夜更公が樓に登らねども。月千鳥に明けかたり。二人、悲しや見渡せば。是は湘浦の浦かどよ。斑に見ゆる雪の竹。涙や色を染むべき。ヒメ、彼唐土の孟宗は。雪中に入り。扇のたれ等をまうく。シテ「今我は又引きかへて。子の別路を悲しみて。竹の雪をかきのくる。我子の死骸あらば。孟宗にはかはりたり。うれしからずの雪の中や。思ひの多き年月も。はや呉竹の窓の雪。夜學の人の燈も。はらはやがて消えやせん。谷を隔つる山鳥の。尾を履む峯の竹には。虎や住むらん恐ろしや。世を驚の聲立て。煙は竹を白雪の。あかじと云へば須磨の浦の。海士の焼くなる鹽やらん。ロンギ地「空に知られて木のもとに。吹きたて、降る雪は。涙滴か落花か。シテ「母は泣くく雪をかけば。ヒメ「姉は父御を恨みて

先づ笠の雪を拂はん。シテ「夜更公が樓に登らねども。月千鳥に明けかたり。二人、悲しや見渡せば。是は湘浦の浦かどよ。斑に見ゆる雪の竹。涙や色を染むべき。ヒメ、彼唐土の孟宗は。雪中に入り。扇のたれ等をまうく。シテ「今我は又引きかへて。子の別路を悲しみて。竹の雪をかきのくる。我子の死骸あらば。孟宗にはかはりたり。うれしからずの雪の中や。思ひの多き年月も。はや呉竹の窓の雪。夜學の人の燈も。はらはやがて消えやせん。谷を隔つる山鳥の。尾を履む峯の竹には。虎や住むらん恐ろしや。世を驚の聲立て。煙は竹を白雪の。あかじと云へば須磨の浦の。海士の焼くなる鹽やらん。ロンギ地「空に知られて木のもとに。吹きたて、降る雪は。涙滴か落花か。シテ「母は泣くく雪をかけば。ヒメ「姉は父御を恨みて

人えれぬ涙せきあへず。シテ「すはや死骸の見えたるは。如何に月若母上よ。ヒメ「姉ころ我と。呼べども叫べども。答ふる聲のなどなきぞ。消えよと思ふ雪は積りて。月若が別れを何れたどへなん。ワキ「此間諸願成就して。只今我屋に下向仕り候ふ。あら不思議や。某が四壁の内け當つて人の泣聲の聞こえ候ふ。あら心もどなや候ふ。や。是は疑ふ所もなく。某が四壁の竹の中にて候ふは如何に。やがてすぐに立ち越え尋ねばやと存じ候ふ。や。さればこう如何に姫。是は何と申したる事や。ヒメ「さん候ふ月若長松へ來り給ひしを。父の召しとて歸りて候へば。竹の雪を拂へと仰せ候ふ程に拂ひて候へば。もとより衣は一重なり。寒風に責められて空しくなりて候ふを。情ある人長松へ此由かくと申し候ふ程に。母上是まで御出でて候ふ。いつれも親に

人えれぬ涙せきあへず。シテ「すはや死骸の見えたるは。如何に月若母上よ。ヒメ「姉ころ我と。呼べども叫べども。答ふる聲のなどなきぞ。消えよと思ふ雪は積りて。月若が別れを何れたどへなん。ワキ「此間諸願成就して。只今我屋に下向仕り候ふ。あら不思議や。某が四壁の内け當つて人の泣聲の聞こえ候ふ。あら心もどなや候ふ。や。是は疑ふ所もなく。某が四壁の竹の中にて候ふは如何に。やがてすぐに立ち越え尋ねばやと存じ候ふ。や。さればこう如何に姫。是は何と申したる事や。ヒメ「さん候ふ月若長松へ來り給ひしを。父の召しとて歸りて候へば。竹の雪を拂へと仰せ候ふ程に拂ひて候へば。もとより衣は一重なり。寒風に責められて空しくなりて候ふを。情ある人長松へ此由かくと申し候ふ程に。母上是まで御出でて候ふ。いつれも親に

てまじませども。母御は是ほど悲しみ給ふに。父御前は子をば
思ひ給はぬぞや。繼母御をば恨むまじ。唯父御前こそ恨めしう
候へ。ワキや。言語道断の次第にて候ふ物かな。いや某は月
若に竹の雪を拂へと申したる事は。夢々なき事にて候ふぞとよ
定めて人の教戒にて候ふらん。是と申すもとにかくれ。只某
が科にて候へ。あら面目なや候ふ。シテ身を梁の燕のなら
ひ。すみねたき事を聞きながら。さまをも今までかへさるは。彼
を思ふ故なるに。うも繼母はいかなれば。此月若をば殺しけん。
よその歎きは一旦の思ひ。唯憂き身ひとりの歎きすかし。命惜
しとも思はず。ワキ身は白雪と消えばやなん。理や面目なや。
思はぬ外のなげきかな。二人の親の悲しみの。不可思議なる
あはれみにや。虚空に聲あつて。竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみど
り子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか

竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか

竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか

へり。悦びは日々添ふ。
地かくて親子に合竹の。世を故郷をあらためて。佛法流布の寺
となし。佛種の縁となりけり。二世安樂の縁ふかき。親子の
道有り難き。

姨捨

をばすて

元清作

ワキ次第 月の名ちかき秋なれや。姨捨山を尋ねん。 詞かやうに
候ふ者は。都方に住居仕る者にて候ふ。我いまだ更科の月を見
ず候ふほどに。此秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候ふ。道行 此程の。
まばし旅居の假枕。また立ちいづる中宿の。あかし暮らして行
く程に。こゝろ名におふ更科や。姨捨山に着きけり。 詞さて
も我姨捨山に來て見れば。嶺平らかにして萬里の空も隔てな
く。千里に限なき月の夜。さこそと思ひやられて候ふ。いかさ

竹林の七賢竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御聲より。月若いさか

ていし明けて出でたるをながめ
く受えければかきよみたりけ
る。更科やをばすて山に照る月を見
てもとよみてなん又いきて迎へ
月の名ちかき。月の静故ちかき
中野山 伊科郡にあり。
送中にて泊る旅宿の事。

桂の木
月み静故ある木を出
だす。

ま此處にやすらひ。今宵の月を詠めばやと思ひ候ふ。
シテ詞「のうくあれなる旅人は何事を仰せ候ふぞ。ワキ詞「さん
候ふ是は都の者よて候ふが。初めて此處に來りて候ふ。扱々御
身はいづくに住む人ぞ。シテ「是はこの更科の里に住む者にて候
ふ。今日は名におふ秋の半。暮るゝを急ぐ月の名の。殊に照り
そふ天の原。くまなき四方の氣色かな。いかに今宵の月の面白
からんずらん。ワキ「扱は更科の人にてましますかや。扱々古へ
姨捨の。在所はいづくの程にて候ふぞ。シテ「姨捨山のなき跡と。
問はせ給ふは心得ぬ。我心慰めかねつ更科や。姨捨山に照る月
を見てと。詠せし人の跡ならば。是に小高き桂の木。陰ころ
昔の姨捨の。其なき跡にて候へとよ。ワキ「扱は此木の陰にして。
捨て置かれにし人の跡の。シテ「其まゝ土中よ埋草。かりなる世と
て今ははや。ワキ「昔語りになりし人の。猶執心や残りけん。シテ

一重山 姨捨山より見渡す十三
段のつなり。紅葉のまだ薄さを露の
薄さよ云ひか。空の晴るゝまがよ。
雲をきて

「なき跡までも何とやらん。ワキ「物すまほしき此原の。シテ「風も
身にしむ。ワキ「秋の心。地「今とても。なぐさめかねつ更科や。
姨捨山の夕暮に。松も桂もまじる木の。緑も残りて秋の葉の。
はや色づくか一重山。薄霧もたちわたり。風冷ましく雲盡きて。
さびしき山の氣色かな。
シテ詞「旅人はいづくより來り給ふぞ。ワキ「されば以前も申すど
とく。都の者にて候ふが。更科の月を承り及び。始めて此所に
來りて候ふよ。シテ「扱は都の人にてましますかや。さらばわら
はも月と共に。顯はれ出でゝ旅人の。夜遊を慰め申すべし。ワキ
「そもや夜遊を慰めんとは。御身はいかなる人やらん。シテ「誠は
我は更科の者。ワキ「扱いまは又何方に。シテ「住家といはんは此
山の。ワキ「名にしおひたる。シテ「姨捨の。地「それといはんも恥
づかしや。其古へも捨てられて。只一人この山に。澄む月の名

八千代に云々

八千代に云々

月かげろふの... 石清水... 山天... 生けるを放つ... 久方の月の影... 久方の月の影... 久方の月の影...

るにて候ふ。

シテ「二月の今日とてや。のどけき春の氣色かな。花の都の空なれや。二人「雲もをさまり風もなし。君が代は千代に八千代にさよれ石の。巖となりて苔のむす。二人「松の葉色も常磐山。緑の空ものどかにて。君安全に民あつく。關の戸さしもささりき。本よりも君を守りの神國に。わきて誓ひも澄める夜の。月かげろふの石清水。絶わぬ境れの末までも。生けるを放つ大悲の光。げにありがたき時代かな。神と君との道すぐに。歩みをはこぶ此山の。松高き。枝もつらなる鳩の嶺。曇らぬ御代は久方の。月の桂の男山。げにもさやけき影に來て。君萬歳と祈るなる。神に歩みをはこぶなり。ワキ詞「今日は當社の御神事とて。參詣の人々多き中に。是なる

御代に云々

御代に云々

翁錦の袋に入れて持ちたるは弓と見たりとも何處より參詣の人ぞ。シテ「是は當社に年久しく仕へ申し。君安全と祈り申す者なり。又是に持ちたるは桑の弓なり。身の及びなければいまだ奏聞申さず。只今御參詣を待ち得申し。君へ捧げ物にて候ふ。ワキ「ありがたしく。先々めでたき題目なり。扱其弓を奏せよとは。私に思ひよりけるか。もし又當社の御託宣か。分きて謂を申すべし。シテ「是は御言葉とおぼはぬ物かな。今日御參詣を待ち得申し。桑弓をさしげ申す事。即ち是ころ神慮なれ。其上きけば千早ふる。二人「神の御代は桑の弓。蓬の矢にて世を治めしも。直なる御代のためとなり。よく奏し給へとよ。ワキ「げに。是は泰平の。御代のはるは顯はれたり。まづ其弓を取り出だし。神前にて拜み申さばや。シテ「いや。弓を取り出だしては。何の御用のあるべきや。昔し唐土周

御代に云々

御代に云々

七十七

御代に云々

瑞籬の 久しきの枕詞。

高良の神 皇山の境内に上の高良の神とて二つあり。上の神は内宿願下は玉手命を祭れり。

人の國より云々 神祇正統記曰く「人皇四十六代孝靈天皇天平御紀七年乙未。皇前御宇佐宮の託宣に云ふ。人の國より我が國の人より我が國の人を守らん」とあり。外國の人より我が國の人を守らんとの意。佛國を借りて眞實の神徳を月に譬へ云ふ。地「袖のしらすの初卯の神樂をもしろやうたへや日影さすまで。瑞籬草に「八幡大菩薩の御歌なり」とあり。日影さすまでハ明朝になるまで高へとの意を日影の神樂の存にかけ云ふ。日影の神樂の存に

ぞありがたき。シテ「ありがたき。千代の御聲を松風の。更け行く月の夜神樂を。奏して君を祈らん。地「祈る願ひも瑞籬の。久しき代より仕へてき。シテ「我は誠は世々を経て。地「今此年になるまでも。シテ「生けるを放つ。地「高良の神とは我なるが。此御代を守らんと。只今こゝに來りたり。八幡大菩薩の御神託を疑ふなどて。かき消すやうに失せにけり。ワキ歌「都に歸り神勅を。悉く奏しあぐべしと。いへばお山も音樂の。聞こえて異香薫すなり。げにあらたなる奇特かな。後シテ「もとよりの人の國より我國。他の人よりもわが人と。誓ひの末も明らけき。眞如實相の規弓の。八百萬代に至るまで。動かす絶えず君守る。高良の神とは我事なり。地「二月の。初卯の神樂おもしろや。シテ「うたへやうたへ日影さすまで。地「袖のしらゆふ返すくも。千代の聲々うたふとかや。

人の冠より垂らし下せるもの、袖の白きをもて作れる神。瑞籬草の神の神を返す事御影向。神の現われ給ふ事。とるしの箱 神体を瑞籬せる箱と云ふ。

風吹く 風の鳴くを云ふ。それを風の吹くにかけたり。大菩薩 神にも佛號を奉る事古への意なり。

前シテ 瑞籬草の神の神を返す事御影向。神の現われ給ふ事。とるしの箱 神体を瑞籬せる箱と云ふ。

ロンギ地「げにや末世といひながら。神の威光はいやまじに。かくあらたなる御影向。拜むぞ尊とかりける。シテ「君を守りの御めぐみ。本よりさだめある上に。殊に此君の神徳。天下一統と守るなり。地「げにく神代今の代の。とるしの箱の明らかに。シテ「此山上に宮居せし。地「神の昔は。シテ「久方の。地「月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。皆神体とあらはれ。げに頼もしき神心。示現大菩薩八幡の。神託ぞゆたかなりける。

項羽

こうう

元清作

ワキ次節「詠め暮らして花にまた。宿かる草を尋ねん。地「是は鳥江の野邊の草刈にて候ふ。今日も草を刈り唯今家路に歸り候ふ。歌「野邊は錦の小菰原。刈萱交じる鳥江野に。草刈る男心なく。

若者路指にして僧寺に歸り。紅葉聲乾いて牡鹿鳴く。な
る夕ま暮。心も澄める面白さよ。一塵。秋毎に。野分を船の追風
にて。地。萩の帆かくる露の玉。
野分を船の追風にて。野分は秋夜く吹く。萩の帆かくる露の玉。
野分を船の追風にて。野分は秋夜く吹く。萩の帆かくる露の玉。

月をや船に。草葉に月をやとし
たなむたり。たなむりのまにや

花を刈るとや思ひ草。家づとなれば色々の。草花の敷を刈り持
ちて。歸れば跡は秋暮れて。枯野にすたく虫の音も。花を惜し
むか心あれ。便船を待ち向へ越さうするにて候ふ。
シテサシ。若者路指にして僧寺に歸り。紅葉聲乾いて牡鹿鳴く。な
る夕ま暮。心も澄める面白さよ。一塵。秋毎に。野分を船の追風
にて。地。萩の帆かくる露の玉。
ワキ詞。のうく其船に乗らうするにて候ふ。シテ。あう召され候
へ。扱船賃は候ふ。ワキ。我等如きの者の船賃参らせたる事はな
く候ふ。シテ。船賃なくは此舟に叶ひ候ふまじ。ワキ。さらば上の
瀬へ廻らうするにて候ふ。シテ。のうく道理は申しつ船に召さ
れ候へ。ワキ。乗りおくれじと草刈は。もとの渚に立ち寄れば。
シテ。とく乗り給へとと寄する。地。露刈り込めて秋草の。葉毎
に影宿る。月をや船に乗せつらん。天の川。たな渡りして七夕

船賃なる事。慮及ぶる事に同じ。

其塚より生ひ出でたる花なれば
種子の或美人草の時。青
花は三原上草。芳心は草花

の。年に一夜は心せよ。秋風吹けば波の音。湊に近き海士小船
水音なしに行く船の。水馴棹をさうよ。
シテ詞。船が着いて候ふ御上り候へ。ワキ詞。御船恐れて候ふ。シテ
「扱船賃は候ふ。ワキ。又船賃と仰せられ候ふよ。其爲めにこう
向ひにて申し定めて候ふに。何とて聊爾なる事をば承り候ふぞ。
シテ。いや船賃と申せばとて。別の子細にても候はゞころ。うれ
程多き草花をなど一本賜はり候はぬぞ。ワキ。あら優じや。何れ
にても召され候へ。シテ。さらば此花を賜はらうするにて候ふ。
ワキ。不思議やな是程多き草花の中に。何とて其花をば撰つて召
され候ふぞ。シテ。さん候ふ是は美人草と申して。故有る花にて
候ふ。ワキ。あら面白や美人草とは。何と申したる謂にて候ふぞ。
シテ。是は項羽の後虞氏と申せし人の。身を投げ空しくなり給ひ
しを。取り上げ土中に築き込め候へば。其塚より生ひ出でたる

氏が別れと我身の。地なり行く草葉の露諸共。消に果てし悲し。思ひ出つれば劍も銚も皆投げ捨て。身を焼く計り口惜しかりし。夢物語を哀れなる。

シテ「あはれ苦しき嘆患の炎。地あはれ苦しき嘆患の炎の。立ち上りつゝ味方を見れば。高祖に屬して寄せ来る波の。荒き聲を聞けば腹立。いで物見せんと自らかけ出で。敵を近付け取つては投げ捨て。又は引き伏せ捻首とりぐに。恐ろしかりける勢なれども。運盡きぬれば烏江の野邊の。土中の塵とすなりにける。

源氏供養

くやうヒ 古名

紫式部

河上神主作 一説元清作

ワキ次第「衣も同じ昔の道。石山寺に参らん。是は安居院の法印にて候ふ。我石山の觀世音を信じ。常に歩みを運び候ふ。今

安居院法印石山寺に参らん。是は安居院の法印にて候ふ。我石山の觀世音を信じ。常に歩みを運び候ふ。今

へたるなれば。先づ其本文を。作に因つて來れるところを合。至る。花の都を立ち出で。見。關の此方の朝霞。されども残る有明の。影も彼方に嶋の海。實に面白き氣色かな。波や。志賀唐崎の二つ松。鹽焼かねども浦の波。立つころ水の煙なれ。シテ「のうく安居院の法印に申すべき事の候ふ。ワキ「法印とは此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。シテ「我石山に籠り。源氏六十帖を書き記し。亡き跡までの筆のすさび。名の形見とはなりたれども。彼源氏に終に供養をせざりし科により。浮かぶ事なく候へば。然るべくは石山にて。源氏の供養をのべ。我跡吊ひてたが給へど。此事申さんとて。是迄参りて候ふ。ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。さりながら易き間の事供養をばのべ候ふべし。扱誰と志して廻向申し候ふべき。シ

源氏物語の五十回
名を大よそに云へるなり
立つ舞の袖。唯今舞うて見せ給へ。恥づかしながらさ
りどては。仰せをばいかで背くべき。いでくさらば舞はんと
て。ワキ「本来其名も紫の。色めづらしき薄衣の。ワキ」日も
紅の扇を持ち。恥づかしながら弱々と。ワキ「あはれ胡蝶
の。遊び。夢の内なる舞の袖。現に返す由もがな。
「花染衣の色重。紫匂ふ袂かな。
シテ「夫れ無常といつば。目の前なれども形もなし。一生
夢の如し。誰有つて百年を送る。藤花一日唯同じ。こ
こに數ならぬ紫式部。頼みを懸けて石山寺。悲願を頼み籠り居
て。此物語を筆に任す。されども終に供養をせざりし科によ
り。俊執の雲も晴れ難し。今逢ひ難き縁に向つて。心中
の所願を起し。一つの巻物に寫し。無明の眠りを覺ます。南無

「いや布施など」は思ひもよらず候ふ。とても此世は夢の内。昔
に返す舞の袖。唯今舞うて見せ給へ。恥づかしながらさ
りどては。仰せをばいかで背くべき。いでくさらば舞はんと
て。ワキ「本来其名も紫の。色めづらしき薄衣の。ワキ」日も
紅の扇を持ち。恥づかしながら弱々と。ワキ「あはれ胡蝶
の。遊び。夢の内なる舞の袖。現に返す由もがな。
「花染衣の色重。紫匂ふ袂かな。
シテ「夫れ無常といつば。目の前なれども形もなし。一生
夢の如し。誰有つて百年を送る。藤花一日唯同じ。こ
こに數ならぬ紫式部。頼みを懸けて石山寺。悲願を頼み籠り居
て。此物語を筆に任す。されども終に供養をせざりし科によ
り。俊執の雲も晴れ難し。今逢ひ難き縁に向つて。心中
の所願を起し。一つの巻物に寫し。無明の眠りを覺ます。南無

源氏物語の五十回
名を大よそに云へるなり
立つ舞の袖。唯今舞うて見せ給へ。恥づかしながらさ
りどては。仰せをばいかで背くべき。いでくさらば舞はんと
て。ワキ「本来其名も紫の。色めづらしき薄衣の。ワキ」日も
紅の扇を持ち。恥づかしながら弱々と。ワキ「あはれ胡蝶
の。遊び。夢の内なる舞の袖。現に返す由もがな。
「花染衣の色重。紫匂ふ袂かな。
シテ「夫れ無常といつば。目の前なれども形もなし。一生
夢の如し。誰有つて百年を送る。藤花一日唯同じ。こ
こに數ならぬ紫式部。頼みを懸けて石山寺。悲願を頼み籠り居
て。此物語を筆に任す。されども終に供養をせざりし科によ
り。俊執の雲も晴れ難し。今逢ひ難き縁に向つて。心中
の所願を起し。一つの巻物に寫し。無明の眠りを覺ます。南無

や光る源氏の幽靈成正覺。抑桐壺の。夕への煙すみやか
に。法性の空に至り。帯木の夜の言の葉は。終に覺樹の花散り
ぬ。空蟬の空まき此世を厭ひては。夕顔の露の命を觀じ。若紫
の雲の迎へ。末摘花の臺に座せば。紅葉の賀の。秋の落葉もよ
しや唯。たまく佛意に逢ひながら。柳葉のさして往生を願ふ
べし。花散る里に住むとて。愛別離苦の理。まぬかれ
難き道とかや。唯すべからくは。生死流浪の須磨の浦を出で。
四智圓明の明石の浦に。澄標いつまでも有りなん。唯蓬生の宿
ながら。菩提の道を願ふべし。松風の吹くとても。業障の薄雲
は。晴るゝ事更になし。秋の風消ゆすして。紫磨忍辱の藤袴。
上品蓮臺に心を懸けて誠ある。七寶莊嚴の眞木柱の下に行かん。
梅が枝の匂ひに移る我心。藤の末葉に置く露の。其玉葛かけし
ばし。朝顔の光頼まれず。朝には柝檀の。陰に宿木名も高

須磨に比す。十二の巻。四宮の明の。四宮と云ふは、一宮の明の。二宮の明の。三宮の明の。四宮の明の。五宮の明の。六宮の明の。七宮の明の。八宮の明の。九宮の明の。十宮の明の。十一宮の明の。十二宮の明の。十三の巻。十四の巻。十五の巻。十六の巻。十七の巻。十八の巻。十九の巻。二十の巻。二十一の巻。二十二の巻。二十三の巻。二十四の巻。二十五の巻。二十六の巻。二十七の巻。二十八の巻。二十九の巻。三十の巻。三十一の巻。三十二の巻。三十三の巻。三十四の巻。三十五の巻。三十六の巻。三十七の巻。三十八の巻。三十九の巻。四十の巻。四十一の巻。四十二の巻。四十三の巻。四十四の巻。四十五の巻。四十六の巻。四十七の巻。四十八の巻。四十九の巻。五十の巻。五十一の巻。五十二の巻。五十三の巻。五十四の巻。五十五の巻。五十六の巻。五十七の巻。五十八の巻。五十九の巻。六十の巻。六十一の巻。六十二の巻。六十三の巻。六十四の巻。六十五の巻。六十六の巻。六十七の巻。六十八の巻。六十九の巻。七十の巻。七十一の巻。七十二の巻。七十三の巻。七十四の巻。七十五の巻。七十六の巻。七十七の巻。七十八の巻。七十九の巻。八十の巻。八十一の巻。八十二の巻。八十三の巻。八十四の巻。八十五の巻。八十六の巻。八十七の巻。八十八の巻。八十九の巻。九十の巻。九十一の巻。九十二の巻。九十三の巻。九十四の巻。九十五の巻。九十六の巻。九十七の巻。九十八の巻。九十九の巻。百の巻。

明石 十三の巻。十四の巻。十五の巻。十六の巻。十七の巻。十八の巻。十九の巻。二十の巻。二十一の巻。二十二の巻。二十三の巻。二十四の巻。二十五の巻。二十六の巻。二十七の巻。二十八の巻。二十九の巻。三十の巻。三十一の巻。三十二の巻。三十三の巻。三十四の巻。三十五の巻。三十六の巻。三十七の巻。三十八の巻。三十九の巻。四十の巻。四十一の巻。四十二の巻。四十三の巻。四十四の巻。四十五の巻。四十六の巻。四十七の巻。四十八の巻。四十九の巻。五十の巻。五十一の巻。五十二の巻。五十三の巻。五十四の巻。五十五の巻。五十六の巻。五十七の巻。五十八の巻。五十九の巻。六十の巻。六十一の巻。六十二の巻。六十三の巻。六十四の巻。六十五の巻。六十六の巻。六十七の巻。六十八の巻。六十九の巻。七十の巻。七十一の巻。七十二の巻。七十三の巻。七十四の巻。七十五の巻。七十六の巻。七十七の巻。七十八の巻。七十九の巻。八十の巻。八十一の巻。八十二の巻。八十三の巻。八十四の巻。八十五の巻。八十六の巻。八十七の巻。八十八の巻。八十九の巻。九十の巻。九十一の巻。九十二の巻。九十三の巻。九十四の巻。九十五の巻。九十六の巻。九十七の巻。九十八の巻。九十九の巻。百の巻。

き。地「官位を東屋の内に籠めて。楽しみ榮ねを。浮舟に譬ふべしとかや。是もかけろふの身なるべし。夢の浮橋を打ち渡り。身の來迎を願ふべし。南無や西方彌陀如來。狂言綺語を振り捨て。紫式部が後の世を。助け給へと諸共。鐘うち鳴らして。廻向も既に終りぬ。
ロンキ地「實に面白や舞人の。名殘今はと鳴く鳥の。夢をも返す袂かな。シテ「光る源氏の御跡を。吊らふ法の力にて。我も生まれん蓮の。花の宴は頼もしや。地「實にや朝は秋の光。シテ「夕べには影もなし。地「朝顔の露稻妻の影。何れかあたらぬ。定めなの浮世や。
地「よくく物を案するに。紫式部と申すは。彼石山の觀世音。假に此世に顯はれて。かゝる源氏の物語。是も思へば夢の世と。人に知らせん御方便。實に有り難き誓ひかな。思へば夢の浮橋

も。夢の間の言葉なり。

其の夢の間に。三十三の巻。三十四の巻。三十五の巻。三十六の巻。三十七の巻。三十八の巻。三十九の巻。四十の巻。四十一の巻。四十二の巻。四十三の巻。四十四の巻。四十五の巻。四十六の巻。四十七の巻。四十八の巻。四十九の巻。五十の巻。五十一の巻。五十二の巻。五十三の巻。五十四の巻。五十五の巻。五十六の巻。五十七の巻。五十八の巻。五十九の巻。六十の巻。六十一の巻。六十二の巻。六十三の巻。六十四の巻。六十五の巻。六十六の巻。六十七の巻。六十八の巻。六十九の巻。七十の巻。七十一の巻。七十二の巻。七十三の巻。七十四の巻。七十五の巻。七十六の巻。七十七の巻。七十八の巻。七十九の巻。八十の巻。八十一の巻。八十二の巻。八十三の巻。八十四の巻。八十五の巻。八十六の巻。八十七の巻。八十八の巻。八十九の巻。九十の巻。九十一の巻。九十二の巻。九十三の巻。九十四の巻。九十五の巻。九十六の巻。九十七の巻。九十八の巻。九十九の巻。百の巻。

錦木

ワキ次第「實にや聞きても忍ぶ山。其通路を尋ねん。詞「是は諸國一見の僧にて候ふ。我いまだ東國を見ず候ふ程に。此度思ひ立

古名 錦塚元 清作

知ろしめさぬの事よかけて云ふ。

千束ともよみ 桐花集ふ「いた
づらふ千束朽ちたし錦木を指す
ひかね今日立てたつかな」
東も持たて逢ふよしも錦木の千
束と見ゆ。毎日一本づつ立つるが
讀んで千本ふよきを云ふなり。

錦木は立てを家ごと云々
拾遺集因の歌なり。錦木の千
束立つるまで取り入れられぬ門
前ふて朽ちたり。さうすれば女の
女の胸に合はぬならんとの意
を。袂を布みて作れる衣の前の
合はぬかかて云ふ。衣の前の
はたはりもなきはよきまかぬ
身ふの意。讀しき身の意。

岩代の。 紀伊の國にて松の名所
なり。 松の言の葉 松の枝を結びて。
我思上尊の叶ハハ其時に解かん
夕日の影も日影も錦の色も見ゆ
る意ふかけた。

錦木や細布の。知ろしめさぬは理なり。ワキ「あら面白の返答や
な。さてく錦木細布とは。戀路によりたる謂よのう。」

「中々の事三年まで。立て置く數の錦木を。日毎に立て、千束と
も讀み。ツレ」又細布は機ばりせばくて。さながら身をも隠さぬ
ば。胸合ひ難き戀とも讀みて。シテ「恨みにも寄せ。ツレ」名をも
立て。」「逢はぬを種と。ツレ」讀む歌の。地「錦木は。立てなが
らう朽ちにけれ。けふの細布胸合はじとやと。さしも讀みし
細布の。機ばりもなき身にて。歌物語り恥づかしや。實にや名
のみは岩代の。松の言の葉取り置き。夕日の影も錦木の。宿り
にいさや歸らん。」

ワキ詞「猶々錦木細布の謂御物語り候へ。シテ詞「昔より此所の習
ひにて。男女の媒には此錦木を作り。女の家門に立つるしる
しの木なれば。美しく色どり飾りて之を錦木と云ふ。さる程に

彼岡に草刈る男 萬葉集の旋頭
歌み「此岡に草刈るをのこ然も
人御馬草にせん」とあるを。初
句「かの岡」と明詠集に「初
を之の用ひたり。袂衣に「尋
蓮芝の露を」云々。袂衣に「尋
問ハハし蓮芝の露」とあるを用
意の玉の 眞如の「教へよや
の御を受け。玉の露の文字を受
けたり。すなはち佛道の聲と見
常陸。常日のおたり所を云
松桂の云々 白氏文集。鳥
三松桂。一松桂二蘭菊。一
ちるを引く。ものすこさな

逢ふべき男の錦木をば取り入れ。逢ふまじきをば取り入れねば。
或は百夜三年までも立ちしによつて千束とも讀めり。又此山陰
に錦塚とて候ふ。是こう三年まで錦木立てたりし人の古墳なれ
ば。取り置く錦木の數とも塚に築きこめて。之を錦塚と申し
候ふ。ワキ詞「さらば其錦塚を見て。故郷の物語にし候ふべし。
教へて賜へり候へ。シテ「あういでくさらば教へ申さん。ツレ
「此方へ入らせ給へとて。二人夫婦の者は先に立ち。彼旅人を伴
なひつゝ。地「けふの細道分け暮らして。錦塚は何處ぞ。彼岡に
草刈る男心して。人の通路あきらかに。教へよや道芝の。露を
ば誰に問はまし。眞如の玉は何處ぞや。求めたくぞ覺ゆる。
テ「秋寒げなる夕まぐれ。地「嵐木枯村時雨。つゆ分けかねて足
引の。山の常陸も物さび。松桂に鳴く鼻蘭菊の花に隠るなる。
狐住むなる塚の草。紅葉ば染めて錦塚は。是ぞと云ひ捨て。」

神皇正統記 卷之六十一
神皇正統記 卷之六十一
神皇正統記 卷之六十一

神皇正統記 卷之六十一
神皇正統記 卷之六十一
神皇正統記 卷之六十一

たて、翔らんとすれども。もちり羽になつて飛行も叶はねば。おそれ奉り拜し申せば。帝釋すなはち雲路をさしてあがらせ給ふ。其時天狗は岩根をつたひ。くだるとぞ見ゆし。いはねをつたひ下ると見わた。深谷の岩洞に入りけり。

皇帝 古名 明王鏡 信光作
同 玄宗

ワキヤシ「春は春遊に入つて夜は夜を専らとし。後宮の佳麗三千人。三千の寵愛一身に在り。かく類なき貴妃の紅色。芙蓉の紅色かへて。未央の柳の力もなし。地「たゞよわくと伏柴の。露の命もいかならん。心づくこの春の夜の。木の間の月も離れて雲井に歸る雁金も。我如くじや鳴き渡る。霞の内の樺櫻。ひとへに惜しき姿かな。
シテ「如何に奏聞申すべき事の候ふ。ワキ「不思議や宮中し

此如何不... 伏柴の... 心づくこの春の夜の... 木の間の月も離れて...

つより物さびて。心を澄ます折節に。御階の下に來るを見れば。さも不思議なる老人なり。うも汝はいかなる者ぞ。シテ「是は伯父の御時に。鐘撞と云ひし者なりしが。及第叶はぬ事を歎き。玉階にて頭を打ち碎き。身を徒になしし者の。亡心是まで参りたり。ワキ「實にさる事を聞きしなり。其ま、都の中にをさめ。贈官せられし大臣の。其亡心は何の爲め。唯今こゝに來れるぞ。シテ「實によく知ろし召されたり。贈官のみか縁袍を。死骸に蒙る舊恩に。今かく君の寵愛し給ふ。貴妃の病ふを平らげて。奇特を見せしめ申すべし。然らば件の明王鏡を。彼御枕に立て置き給はゞ。必ず姿を顯はさんと。直奏かたく申し上げ。我通力を起しつゝ。楊貴妃の花の姿。誘ふ風を静めんと。申しもあへず其姿。御階の下に失せけり。

ワキ「如何に貴妃。今日はいつしか曇る日の。暮るゝ夕へも朧月

伊豆の國府もつと國府の國の

頼みたる人の事にて候ふとハ我主人をりとの事。

の數に入らばやと存じ。只今春榮がかりかへと急ぎ候ふ。道行住
み馴れし。都の空は雲井にて。朝立ち添ふる旅衣。日も重なりて行
く程に。名にのみ聞きし伊豆の國府。三島の里につきにけり。
シテ急ぎ候ふほどに。伊豆の三島に着きて候ふ。此處にて
囚人の奉行をば。高橋とやらん申し候ふ。尋ねて對面申したき
よし申し候へ。トモ畏つて候ふ。如何に案内申し候ふ。囚人奉
行高橋殿と申すは何處に御坐候ふぞ。狂言何の御用にて候ふぞ。
頼みたる人の事にて候ふ。トモいや苦しからぬ者にて候ふ。是
は春榮殿のゆかりの者にて候ふ。高橋殿へと御目にかゝりた
き事の候ひて是まで参りて候ふ。其由をよく御心得あつて
御申し候へ。狂言心得申し候ふ。囚人のゆかりの人は堅く禁制
にて候へども。春榮殿の御事は頼み候ふ人別して痛はり申され
候ふ間。其由を申して見候ふべし。暫く御待ち候へ。トモ心得

大法の事囚人や捕人ハ太刀

申し候ふ。狂言如何に申し候ふ。春榮殿のゆかりと申して若き
男の來り候ひて。御目にかゝりたきよし申し候ふ間。かたく御
禁制にて候へども。春榮殿の御事にて候ふ間申し入れて見うす
る由申して候ふ。ワキ何と春榮殿のゆかりの人と申して。某
に對面ありたき由申すか。汝も知る如く。囚人のゆかりに對面
は禁制にて候へども。春榮殿の御事は別して痛はり申し候ふ間。
うと對面申さうするにて候ふ。さりながら大法の事にて候ふ間。
太刀刀をあげかり候へ。狂言畏つて候ふ。いかん申し候ふ。只
今の通りを申して候へば。かたく禁制にて候へども。春榮殿の
ゆかりの御事にて候ふほどに。うと御目にかゝらうすると申さ
れ候ふ。さらば太刀かたなを給はり候へ。トモ心得申し候ふ。
尋ね申して候へば。春榮殿のゆかりならば。高橋別して痛はり
申し候ふ間。對面申さうする由申され候ふ。さりながら大法に

て候ふ程に。太刀かたな禁制の由申し候ふ。シテ「さらば太刀刀を
参らせ候ふべし。」

ワキ「春榮殿のゆかりと仰せ候ふはいつくに渡り候ふぞ。シテ「こ
ん候ふ是に候ふ。ワキ」是は春榮殿の爲めには何にて渡り候ふや。

シテ「是は春榮が兄に。増尾の太郎種直と申す者にて候ふが。今
度宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ。其矢をぬかんと少し傍

に引き退き候ふ間に。弟にて候ふ春榮深入りし生け捕られて候
ふ間。餘りに見捨て難く候へば。某も一所に誅せられん爲めに

送々是まで参りて候ふ。春榮に引き合はせられて賜はり候へ。
ワキ「委細承り候ふ。是までの御出で誠に勇々しく候ふ。やがて

其由を春榮殿へ申し候ふべし。暫く御待ち候へ。シテ「心得申し
候ふ。

ワキ「いかん春榮殿へ申し候ふ。御身の御舎兄に。増尾の太郎

種直と御名のり在つて。是まで御出でにて候ふ。急いで御對面

候へ。春榮「是は誠しからず候ふ。兄にて候ふ者は。宇治橋の
合戦にて重手おひ。存命不定とて承り候ひつれ。ワキ「あら不

思議や。正しく御舎兄と仰せ候ふ物を。さりながら物のひまよ
りうと御覽候へ。春榮「ふしぎなる事にて候ふ。譜代召しつかひ

候ふ家人にて候ふ間。急ぎ追つ歸して賜はり候へ。ワキ「扱は誠
に家人にて候ふか。さあらばやがて追つ歸し候ふべし。如何に

以前の人の渡り候ふか。シテ「是に候ふ。ワキ「仰せの通りを申し
て候へば。物のひまより御覽候ひて。兄にてはなし。譜代召し

つかはるゝ家人なれば。急ぎ追つ歸し申せとの御事にて候ふ。
何とて聊爾なる事をば承り候ふぞ。シテ「暫く。まづ御心を静め

て聞こし召され候へ。家人の身として兄と名のり。一所に誅せ
らるゝ事の候ふべきか。いかやうにも御沙汰候ひて。引き合ハ

ふしぎなる事にて候ふ。此前の
前代に透見をしたると知るべし。
譜代「代々其家多召し候ふ家人
を云ふ。

御覧なる
處忽と云ふに同

家人か兄かの勝劣を
よが敵か兄と云ふは勝劣の勝
を正すを云ふ。

せられて賜はり候へ。某對面して。家人か兄かの勝劣を見せ申し候ふべし。ワキ「實にく是は尤にて候ふ。さらば某たばかつて呼び出だし候ふべし。其時御袖にすがられて委しく仰せ候へ。シテ」心得申し候ふ。さらば是に待ち申し候ふべし。

ワキ「如何に春榮殿に申し候ふ。只今かの者をばあらく」と申し追つ歸して候ふさりながら。彼者の心中あまりに不便に候ふ間。うしろ姿をうと御覽候へ。此方へ渡り候へ。

シテ「如何に春榮。何とて某をば家人とは申すぞ。扱も此度宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ。其矢をぬかんと少し傍に引き退き候ふひまに。御身は深入りして生け捕られたり。其際の先途をも見届けされば。家人といふ事弟ながらも恥づかしうころ候へさりながら。一處に誅せられん爲めに。是まで遙々來りたるに。何とて家人とは申すぞ。春榮「いかに汝は三世のよしみを思

其際の先途をも
生け捕られて
其の生死如何をも云ふは勝劣の勝

三世のよしみ
過去現在未來の
三世を兼ねたる主従の縁を云

逆さまなる御用らひ
法事をして買ふを云ふ。
深山木の其梢とも見えたりし
花に引く。つひにあらう。深木の歌
り。先づ春を出だす。

時を得て云々
前日の花映
て。夏木立の梢に花を紅葉も
あらう。夏を出だす。又紅葉の中
山皆染むる云々。又紅葉の中に
松の梢のあらう。秋を引く。
て。秋の葉をば由を執断す。秋
を出だす。
一千年の云々。よたひ松の枝
をば。今に止めた。今
し。今に止めた。今
し。今に止めた。今
し。今に止めた。今

御芳志に刀を賜はり候へ。前日の
東天に對して云ふ心なり。

ひ。是まで遙々きたりたる心ざし。返すぐもやさしけれさりながら。汝は故郷に歸り。母御に申すべきやうは。春榮ころ誅せられ候へ。逆さまなる御吊らひにころあづかり候ふべけれとよくよく申し候へ。シテ「猶も家人と申すか。深山木のうの梢とは見えざりし。櫻は花に顯はれにけり。何と家人と朽たすとも。終には隠れよもあらじ。春榮「時を得て早くもうたつ夏木立。其木をうれと見るべきか。早く歸れと叱りけり。シテ「山皆染むる梢にも。松は替はらぬならひぞかし。春榮「一千年の色とても。雪にはしばし隠るゝなり。シテ「是を物にたとふれば。股のやうか父を討ち。春榮「秦のかくいしは師匠を討つ。シテ「今の増尾の春榮は。春榮「現在の兄を家人といふ。シテ「是は逆罪たるべきに。春榮「誠は深き孝行なり。シテ「いやとにかくに命を捨つるまで。種直これにて腹切らん。や。刀は參らせつ。御芳志に刀を賜はり

命を助け申さんまてこと云々
兄の命を捨ててさすまいが
願する事深く願したるに
のわやうの次第なりしと其無
の罪を謝するをり。

候へ。春榮のうく暫くこはいかに。命を助け申さんまてこ
ろ。家人とは申しつれ。忠が不忠になりけるか。ゆるさせ給へ
兄御前。種直も春榮も。囚人守護の兵も。たがひの心を思ひ
やり。實に持つべきは兄弟なりとて。共に袂をぬらしけり。
ワキ詞「言語道斷。御兄弟の御心中を感じ申し。我等も落涙仕り
て候ふ。如何に種直に申し候ふ。某春榮殿を痛はり申す事餘の
儀にあらず。某子を一人持ちて候ふを。宇治橋の合戦に討たせて
候ふが。此春榮殿の面さし少しも違はず候ふ間。天晴御命も助
かり給ひ候へかし。某申しうけ遺跡を繼がせ申し度きとの念願
にて候ふ。や。何と申すぞ。是は誠にであるか。あら何ともなや
只今申しつる事も徒事にて候ふ。又鎌倉より早打立つて。箱根
を越さぬ先に。囚人を皆誅し申せと仰せ出だされて候ふ。御痛
はしながら力なき事。春榮殿も御最期の御用意をさせ申され候

日誌にて
四人の姓名を日誌に
記して候。種直に
あてて候。

小太郎
種直が使者の

へ。また種直は急いで故郷へ御歸り候へ。暫く候ふ。春榮
が事は幼き者の事にて候ふ間。春榮を助け。某を誅して賜はり
候へ。ワキ「仰せはさる事にて候へども。はや目録にて御目にか
けて候ふ間。中々叶ひ申すまじく候ふ。仰せはさる事にて
候へども。ひらに私を以つて春榮を助け。某を誅して賜はり候
へ。ワキ「是は尤にて候へども。中々左様にはなるまじく候ふ。
シテ「扱は力なき事。是まで遙々きたり候ひて。春榮が最期を見
捨て歸る事はあるまじく候ふ間。某をも一處に誅して賜はり候
へ。ワキ「それはともかくもにて候ふ。
シテ詞「如何に春榮故郷へ形見を送り候へ。いかに小太郎。お事
は國に歸り母御に申すべきやうは。春榮が最期の有様あまりに
見すて難く候ふ程に。諸共に誅せられ候ふ。逆さまなる御吊ら
ひにこそ預かり候ふべけれどよく申し候へ。是なる守りは

うば玉の... 我黒髪... 一期の文にて候ふなり。又かたみにはうば玉の。我黒髪... 見に参らする。...

成人の子をば... 成人の子をば先立て。...

十二因縁... 十二因縁... 羊鹿牛車に乗り。...

種直が。母御の方より賜はりたる。守佛の觀世音。種直が形見に御覽候へど。よくく申し候へ。是なる文は春榮が。最期... 見に参らする。...

生じて... 生じては死し死しては生じ。...

間界に生まるれば。八つの苦しみ離れず。過去因果經をおもん見よ。殺の報殺の縁。たどへば車輪の如く。我人を失へば。...

かなる人界の響に用ひた迎
來迎の夜念佛の響に用ひた迎
り迎ふるを得つゝ念の念佛なれ
唯心の神土 禪樂の遠からず
三島の明神 祭神の大山祇命
本地大通智勝佛と云ふ佛と云
林の大通智勝佛と云ふ佛と云
過去無量の如くして 過去去り
し前の事すべて塵の如くはか
なれどもなり
中有 死者の行く世界を云ふ
中もつつかずして魂の迷ひ居
る間を云ふ
長短の巻 これも冥途の道の
さまなり 長短なる所を云ふ
雲の古枝の云々 雲の思慕を
散美して 枯木にも花を思慕し
むるを常云へり 春樂兄弟も
其如く 既に死と定まりたる身
なれど 宿神佛の力にて花さき
生かかへる事ありんか 頼も
しき心なり 「ふたつ花や」の句
云ふ前の「前ちの先に」との句
に應じたる如し
うれしさを
度が過ぎて何と云ふれぬの
意
歌の雲に映えけん 天にもあは
る心地なるを云ふ 從南王の詞
安と云ひし人 雲を食して仙人
に爲り 其食しのごりの樂を人
犬どもになめさせしかば 皆飛
びのぼりて天上に鳴き天の
雲間に映わたる 云ふ古事

ワキ「すは又早打きたれるは。遅し切れとの御使か。早打「いや若
宮別當の申しにより。囚人七人の免狀なり。ワキ「扱春榮殿は。早
打「七人の中。ワキ「あうれし、くまづ讀まん。何々若宮別當
の申しにより。囚人七人免狀の事。第一番には別當の御弟豊前
の前司。第二番には豊後の次郎。第三番には増尾の春榮丸。殘
りは先々讀みても無益。はや助くるぞ春榮と。地「太刀の下より
ひきたてて。命助かる兄弟は。うれしさも中々に。思はぬほど
の心かな。今の心は獸の。雲に吠けん心地して。千々の情あ
りがたき。兄弟のよしみころ。誠にあはれなりけれ。
ワキ「いかに種直に申し候ふ。以前も申す如く。春榮殿の御事
天晴御命も助かり給ひ候へかし。申し受け某が一跡をつがせ申
したきとの念願かなひて候ふ。此上は賜はり候へ。シテ「實に
此上は參らせ候ふへし。ワキ「今日は殊更最上吉日なれば。家に

忍月令月 明法集に嘉辰令月歌
無極。萬歳千秋樂未。央とあ
り

千秋萬歳の 樂樂に千秋樂萬歳
樂の名あり。 古今樂の歌を
千代に八千代を 古く樂の歌を
引く。「文字」祝言の詞に
かゝる。

東路の秩父の山の云々 此歌出
處詳ならず。
老木も若縁 まうとを祝ふ詞な
り。立つや若竹の。今歳生ひの竹が
立ち榮ゆるの。子を祝して云

傳はる重代の太刀。春榮殿に奉り。重ねて千秋萬歳の。地「猶
よろこびの盃の。影もめぐるや朝日影。伊豆の三島の神風も。
吹き治むべき代の始め。幾久しきとも限らじや。嘉辰令月とハ。
此時をいふぞめでたき。猶々めぐる盃の。度かさなれば春榮も
お酌に立ちて親と子の。定めをいはふ祝言の。千秋萬歳の舞の
袖。ひるがへし舞ふどかや。シテ「千代に八千代をさざれ石の。
地「いはふ心は萬歳樂。
ワキ「いかに種直。かゝるめでたき折なれば一指御舞ひ候へ。シ
テ「さらばそと舞はうするにて候ふ。地「祝ふ心は萬歳樂。シテ「東
路の。秩父の山の松の葉の。地「千世の陰をふ若縁かな。シテ「老
木も若縁。地「立つや若竹の。シテ「親子の睦み。地「又は兄弟。彼
といひ是といひ。いづれもくむつまじく。親子兄弟と榮ふる
事も。是れ孝行を守り給ふ。三島の官の御利生と伏しをがみ。

親子兄弟さもむつまじくうちつれて。鎌倉へころみりけれ。

籠太鼓 元清作

ワキ 是は九州松浦の何某にて候ふ。さても某召しつかひ候ふ
ハ 關の清次と申す者。他郷の者と口論し。念なう敵をば討つて候
ハ 夫。さりながら科人の事にて候ふ間。やがて籠者させて候ふ。彼
ハ 者大剛のものにて候ふ間。番の事かたく申しつけばやと存じ候
ハ 夫。いかん誰かある。御前に候ふ。彼者大剛の者に
ハ 狂言 畏つて候ふ。番の事かたく仕り候へ。狂言 畏つて候ふ。
ハ 狂言 いかん申え上げ候ふ。清次が今夜籠を破りぬけて候ふ。ワキ
ハ 詞 何と清次が籠よりぬけたると申すか。言語道断の事。扱ころ
ハ 最前より堅く申し付けてあるに。さやうに油断仕りてあるぞ。
ハ さて彼者の子はなきか。狂言 いや子はなく候ふ。ワキ 妻はな

きか。狂言 うれば御座候ふ。ワキ さらば急いで其女をつれ
て来り候へ。狂言 畏つて候ふ。
シテ 科人をめしこめられ候ふ上は。女までの御罪科はあまり
に御情なう候へ。ワキ いかん女。さても汝が夫の清次。今
夜籠を破り失せぬ。夫婦の事なれば知らぬ事はあるまじ。まつ
すぐに申し候へ。シテ もとより賤しき者なれば。我身の助かり
候ふをこそ喜び候ふべけれ。妾にはかくとも申さず候ふほどに。
夢にも知らず候ふ。ワキ いやく何と申すとも知らぬ事はある
まじ。まづく落居の有らんほど。夫の代りに籠者させ。其有
所をたゞさんと。地 いまの女を引き立て。いろき籠者になす
べしと。さも荒けなき人心。情なことは思へども。殺害の科を
のがれえぬ。報いのほどを無慙なる。
ワキ やあいかん汝は女に向ひ何事を申すぞ。所詮いまよりハ

科人をめしこめられ候ふ上は。女までの御罪科はあまりに御情なう候へ。

落居の有らんほど。夫の代りに籠者させ。其有

所をたゞさんと。地 いまの女を引き立て。いろき籠者になす
べしと。さも荒けなき人心。情なことは思へども。殺害の科を
のがれえぬ。報いのほどを無慙なる。
ワキ やあいかん汝は女に向ひ何事を申すぞ。所詮いまよりハ

松浦の川や 夫婦の縁を長久に
く行末かけて待つ意。松の如
く堅ゆる意もあるべし。

地 彌陀誓願のちかひかや。科を助くるあはれみの。あらありが
たの御慈悲や。
地 やがて時日をうつつさす。かくれま夫を尋ねつ。もとの如く
に歸りぬて。むすぶ契のすゑ久に。松浦の川や二世の縁。げに
ありがたき心かな。

一角千人

いつかくせんにと

元安作

一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人
一角千人 天宮仙人

ワキ詞 是は天竺波羅奈國の帝王に仕へ奉る臣下なり。扱も此國
の傍に一人の仙人あり。鹿の胎内に宿り出生せし故により。額
に角一つ生ひ出でたり。是に依つて其名を一角仙人と名づく。
さる子細有つて龍神と威を争ひ。仙人神通を以て諸龍を悉く岩
屋の内に封じてむる間。數月雨下らす候ふ。帝此事を歎き給ひ。
色々の御方便をめぐらし給ひ候ふ。こゝに施陀夫人とてならび

高し奉り 御供申しに同じ。

山遠客三行客路 松風集 旅人
旅人の遠く通すゆへに松風の聲を
聞かす事。松風の聲を聞かす事。
旅人の遠く通すゆへに松風の聲を
聞かす事。松風の聲を聞かす事。

たづきも知らぬ山中に 松の
も知らず不知案内なるを云ふ。
古今集に「遠近のたづきも知ら
ぬ山中に」云ふ事用よ。

松の枝を引き結びたるを云ふ。松や
桂の木の枝にて作れるを云ふ。
松の枝を引き結びたるを云ふ。松や
桂の木の枝にて作れるを云ふ。

なき美人の御座候ふを。踏み迷ひたる旅人の如くにして。仙境
に分け入り給へ。夫人に心を移し。神通を失ふ事も有るべき
との御方便により。夫人を具し奉り。唯今彼山路に分け入り候
ふ。ワキ一塵 山遠うしては雪行客の跡を埋み。松寒うしては風
旅人の。夢をも破る假寐かや。露時雨。漏る山陰の下紅葉。
色添ふ秋の風までも。身にしみまざる旅衣。霧間を凌ぎ雲を分
け。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなくも踏み迷ふ。道の行
方は如何ならん。
ワキ詞 日を重ねて急ぎ候ふ程に。何處とも知らぬ山路に分け入
りて候ふや。こゝに怪しき岩間の陰より。吹き来る風のかう
ばしく。松桂の枝を引き結びたる菴あり。若し彼仙境にてもや
候ふらん。暫く此あたりに徘徊し。事の由を窺はばやと思ひ候
ふ。

瓶に谷津一滴の水を納め。鼎に青山数片の雪を煎す。曲終へて人見えす。江上數峯青かりし。梢も今は紅の。秋の氣色は面白や。

如何に此菴の内へ申すべき事の候ふ。不思議やここの高山重疊として。人倫通はぬ所なり。うも御身は如何なる者ぞ。是は唯山路に踏み迷ひたる旅人なるが。日もやうやう暮れかゝり前後を念じて候ふ。一夜の宿を御かし候へ。さればこころ人間の交わりあるべき所ならず。とくく歸り給へとよ。うも人間の交はりなきとは。扱は天仙の住家やらん。先々姿を見せ給へ。此上は愧づかしながら我姿。旅人にまみえ申さんと。柴の扉を推し開き。立ち出づる其姿。緑の髪も生ひ上る。牡鹿の角の束の間も。仙人を。今見る事不思議なる。

唯今思ひ出だして候ふ。扱は承り及びたる一角仙人にて御座候ふか。さん候ふ是こころ一角と申す仙人にて候ふ。扱々めんくを見申せば。尋常の旅人にあらず。さも美しき宮女の姿。桂の黛羅綾の衣。更ニ唯人とは見え給はず候ふ。是は如何なる人にてましますや。さきに申す如く。踏み迷ひたる旅人にて候ふ。旅の疲の慰みに。酒を持ちて候ふ一つ聞し召され候へ。いや仙境には松の葉をすき。苔を身に着て桂の露を甜め。年経れども不老不死の此身なり。酒を用ふる事有るまじ。尤仰せはさる御事なれども。唯志を受け給へと。夫人は酌に立ち給ひ。仙人に酒を進むれば。實に志を知らざらんは。鬼畜には猶劣るべしと。夕の月の盃を。受くる其身も仙人の。折る袖匂ふ菊の露。うち拂ふにも千代は経ぬべき。契は今日を始めなる。夫人面白や盃の。めぐる光も照り添ふ

瓶に谷津一滴の水を納め。鼎に青山数片の雪を煎す。曲終へて人見えす。江上數峯青かりし。梢も今は紅の。秋の氣色は面白や。

如何に此菴の内へ申すべき事の候ふ。不思議やここの高山重疊として。人倫通はぬ所なり。うも御身は如何なる者ぞ。是は唯山路に踏み迷ひたる旅人なるが。日もやうやう暮れかゝり前後を念じて候ふ。一夜の宿を御かし候へ。さればこころ人間の交わりあるべき所ならず。とくく歸り給へとよ。うも人間の交はりなきとは。扱は天仙の住家やらん。先々姿を見せ給へ。此上は愧づかしながら我姿。旅人にまみえ申さんと。柴の扉を推し開き。立ち出づる其姿。緑の髪も生ひ上る。牡鹿の角の束の間も。仙人を。今見る事不思議なる。

唯今思ひ出だして候ふ。扱は承り及びたる一角仙人にて御座候ふか。さん候ふ是こころ一角と申す仙人にて候ふ。扱々めんくを見申せば。尋常の旅人にあらず。さも美しき宮女の姿。桂の黛羅綾の衣。更ニ唯人とは見え給はず候ふ。是は如何なる人にてましますや。さきに申す如く。踏み迷ひたる旅人にて候ふ。旅の疲の慰みに。酒を持ちて候ふ一つ聞し召され候へ。いや仙境には松の葉をすき。苔を身に着て桂の露を甜め。年経れども不老不死の此身なり。酒を用ふる事有るまじ。尤仰せはさる御事なれども。唯志を受け給へと。夫人は酌に立ち給ひ。仙人に酒を進むれば。實に志を知らざらんは。鬼畜には猶劣るべしと。夕の月の盃を。受くる其身も仙人の。折る袖匂ふ菊の露。うち拂ふにも千代は経ぬべき。契は今日を始めなる。夫人面白や盃の。めぐる光も照り添ふ

片しき臥せば 酔ひ伏すを云ふ。

無明の酒 酔ひ心を暗まし迷ひ 酔ひのなれば云ふ。

や。紅葉襲の袂を共に。纏しひるがへす。舞樂の曲うおもしき。

地「糸竹の調べとりぐに。指す盃も度々めぐれば。夫人の情に心を移し。仙人は次第に足弱車の。めぐるもたゞよふ舞の袂を。片しき臥せば。夫人は悦び官人を引き連れ。遙々なりし山路を凌ぎ。帝都に歸らせ給ひけり。

地「かゝりければ岩屋の内しきりよ鳴動して。天地も響くばかりなり。

シテ「あら不思議や思はずも。人の情の盃に。酔ひ伏したりし其隙に。龍神を封じてめ置きし。岩屋の俄に鳴動するは。何の故にて有るやらん。龍神「如何にやいか一角仙人。人間に交はり心を迷はし。無明の酒に酔ひ伏して。通力を失ふ天罰の。報いの程を思ひ知れ。

ゆるぐ 動くも同じ。

玉具の劍 玉ふて御れる劍の

立つ白波ふ飛びうつして 水を離れて飛行の出来ぬものなれば。自ら雨をよらし波を起して岩屋より之み乗り移るなり。

シテ 自然居士
子方(鑑)し女児
ワキキ 商人
狂言 商人
自然居士は説法の場に説話を上げに來れる女児あり。やがて無情にも商人に連れゆかれんとせしむ。體々の耻を忍び力を盡して居士に助けかへす事を作れり。

雲居寺 今は絶たたり。東山の高野寺が其跡跡の地なりと云ふ。

地「山風あらく吹き落ちて。空かき曇り。岩屋も俄にゆるぐと見えしが。磐石四方に破れ砕けて。諸龍の姿は顯はれたり。シテ「其時仙人驚きさわき。地「其時仙人驚きさわき。利劍をおつ取り立ち向へば。龍王は黄金の甲冑を帶し。玉具の劍の刃先を揃へ。一時が程は戦ひけるが。仙人神通の力も盡きて。次第に弱り倒れ臥せば。龍王よろこび雲を穿ち。雷鳴稻妻天地に満ちて。大雨を降らし洪水を出だして。立つ白波に飛びうつして。又龍宮にぞ歸りける。

自然居士

とねんこじ

清次作

狂言「かやうに候ふ者ハ。東山雲居寺のあたりに住居仕る者にて候ふ。こゝに自然居士と申す喝食の御座候ふが。一七日説法を御述べ候ふ。今日結願にて御座候ふ。皆々参りて聽聞申し候

説法の場さまされ申す。女児を
奪ひ去りて御辭せしむ云ふ。是
をされしと、奥をさますなど云ふ
に同じ。

衣に恐れて 體をなす故に無禮
是も汝が云々 又女児をひ
打たれて聲の 女児のさま
打たれて聲の 女児のさま

此者を 女児の事。

小袖を召され候ふ上は 小袖と
女児と交換なればの意。小袖と
笑止が候ふ 困つた事があるの

我等が中に云々 人商人の中間
に規則のある云ふ。

身を徒になす者 この女児の如
く身を捨て、買はれゆくもの
云ふ。

此者と連れて 此女児と共に居
士同行してなり。

拷問 罪人を刑罰に行ふ事。

拷問と云つば捨身の行 拷法の
爲めふつ拷問も恐れぬの意。

ふつと 決して云ふ聲の
意。

もてあつて もてあつて
の意。

人に買ひかへて 人を買ふに
入しての意。

候ふが。説法の場さまされ申す。恨み申しに來りたり。ワキ「説法

には道理を述べ給ふ。我等に僻事なき物を。シテ「御僻事とも申

さばこそ兎に角に。本の小袖は參らす。舟に離れて叶はしと

裳裾を波にひたさつ。舟はたに取り付き引きとむ。ワキ「あ

ら腹立ちやさりながら。衣に恐れて得は打たず。是も汝が料ぞ

とて。贈權を持つて散々に打つ。シテ「打たれて聲の出でざる

は。若し空しくやなりつらん。ワキ「何じよ空しくなるべきと。

シテ「引き立て見れば。ワキ「身には繩。口には綿の嚙をはめ。

泣けども聲が出でばこころ。シテ詞「あら不便の者や。やがて連れて歸らうするぞ心安く思ひ

候へ。ワキ詞「のう自然居士舟より御おり候へ。シテ「此者を賜は

り候へ。小袖を召され候ふ上は御損も候ふまじ。ワキ「參らせた

くは候へどもこころに笑止が候ふ。シテ「何事にて候ふぞ。ワキ「さ

ん候ふ。我等が中に大法の候ふ。それを如何にと申すに。人を

買ひ取つて再び返さぬ法にて候ふ程に。え參らせ候ふまじ。シ

テ「委細承り候ふ。又我等が中にも堅き大法の候ふ。かやうに身

を徒になす者に行き逢ひ。若し助け得ねば。再び菴室へ歸らぬ

法にて候ふ程に。其方の法をも破るまじ。又此方の法をも破られ

申すまじ。所詮此者と連れて奥陸奥の國へ下るとも。舟よりは

おりまじく候ふ。ワキ「舟より御おりなくは拷訴をいたさう。シ

テ「拷訴といつば捨身の行。ワキ「命を取らう。シテ「命を取るとも

ふつと下りまじ。ワキ「何と命を取るともふつと下りまじ

いと候ふや。シテ「中々の事。ワキ「いや此自然居士にもてあつか

うて候ふよ。のう渡り候ふか。ツレ「何事にて候ふぞ。ワキ「扱是

は何と仕り候ふべき。ツレ「是は御返しなうては叶ひ候ふまじ。

よくく物を案じ候ふに。奥より人商人の都に上り。人に買ひ

かねて。自然居士と申す説經者を買ひ取り下りたるなにと、
申し候はゞ。一大事にて候ふ程に。御返しなうては叶ひ候ふま
じ。ワキ「我等も左様に存じ候ふさりながら。唯返せば無念に候
ふ程に。色々になぶつて返さうするにて候ふ。ツレ」尤然るべう
候ふ。

ワキ詞「のうく自然居士急いで舟より御上り候へ。シテ」いや
いや聊爾には下りまじく候ふ。ワキ「何の聊爾の候ふべき唯御上
り候へ。シテ」あゝ船頭殿の御顔の色こそ直つて候へ。ワキ「いや
ちつとも直り候ふまじ。又是なる人の申され候ふは。今度始め
て都へ上りて候ふが。自然居士の舞の事を承り及びて候ふ。一
指舞うて御見せあれと申され候ふ。シテ」總じて居士は舞まうた
る事はなく候ふ。ワキ「それは御偽りにて候ふ。一年今の如く説
法御述べ候ひし時。いで聽衆の眠り覺まさんと。高座の上にて

自然居士の事。

狂言綺語 たいむれの言葉を以
て佛法を説く事。こゝろの亂れ
に舞まうて説法の助けにせし事
を云へるなり。

つれなう候ふ 無情なりの意。
志賀幸崎の一つ松
のなき食に云ひかけたり。一本
松なればなり。

水上 是より舞なる。
支那上古の天子。少昊の
子にて姓は姒孫名は軒轅。五帝
の一なり。

一指御舞ひ有りし事。奥までも其聞こは候ふ程に。一指御舞ひ
候へ。シテ「あうそれは狂言綺語にて候ふ程に。左様の事も候ふ
べし。舞をまひ候はゞ此者を賜はり候ふべきか。ワキ「先づ御舞
を見て。其時の仕義によつて参らせ候ふべし。是に烏帽子の候
ふ。是を召して御舞ひ候へ。シテ」よくく物を案するに。終に
は此者を賜はらんすれども。唯返せば損なり。居士を色々に
なぶつて恥を與へうと候ふな。餘りにそれはつれなう候ふ。ワ
キ「何のつれなう候ふべき。シテ」志賀幸崎の一つ松。地「つれなき
人の心かな。
シテ」抑も舟の起りを尋ぬるに。水上黄帝の御宇より事起つ
て。地「流れ貨狄が謀より出でたり。シテ」サシ「こゝに又蚩尤とい
へる逆臣あり。地「彼を亡ぼさんとし給ふに。烏江といふ海を隔
て。攻むべき様もなかりしに。ワキ「黄帝の臣下に。貨狄と云

執心を疎すなるべし。この胸懐など思ふや。尸骸を失ひたる靈魂の空しく猶此世を去りやうで迷ふ心なり。

絶えこがれ 唯も絶ゆるはどふ
泣きこがれ 唯も絶ゆるはどふ
逢ふ事のうれしきも うき身
に返すよしもがな。 シテ

燕子 燕子を云ふ。
花子 花子を云ふ。平家源氏の花子なるべし。平家源氏の子として絶望を断るべき身なるものなり。

閻王 地獄の主なり。

まげし暇を 燕子の面を
此世に來る暇を 燕子の面を
燕子の契も 此世は再び對面し
がたきを云ふ。

の人の心やな。面々是まで來り給ふも。我に對面の爲めならずや。はづかしながらいにしへの。敦盛が幽靈來りたり。子^チのう敦盛とはわが父かど。身にも覺えず走りより。地^チ杖にすがり絶えこがれ。泣く音にたつる鶯の。逢ふ事のうれしきも。うき身にあまるばかりなり。かくは思へど頼まれぬ。夢の契りを。現^キに返すよしもがな。 シテ無慙やな念れがたみの燕子の。花やかなるべき身なれども。衰へはつる墨染の。杖を見るころあはれなれ。さても御身孝行の心深き故。加茂の明神に歩み運び。夢になりとも我父の。姿を見せてたび給へと祈誓申す。明神あはれみおはしまし。閻王に逢せつかはさる。閻王はせを蒙り。しばしの暇を賜はるなり。親子の契も今を限りなるべし。 地更け行く月の夜もすがら。昔をいさや語らん。 シテ然るに平家の。榮花を極めし其始め。花鳥風月のたはむ

木曾のかけはし 各所なれば
「かけ」を呼び用さるるに
合めり。木曾の御所に討たれたる意を
花の都を立ち出で。元暦元年を

天^チの住居の 藤原の御所。
藤原の御所を奉じて西國に
一行在所をうつしある事
又立ちかへる 京都近くみ
し事を波の立ちかへるに
一門 平家の一族。

生田川の身を捨てし 大和物語
の國の生田の川の名のなかり
り。それを引きて戦死の討死せ
しことを云ふ。關原杯と云ふ
酒を飲する事。

れ。詩歌管絃のさまぐに。春秋を送り迎へしに。如何なるをりか來りけん。木曾の懸橋かけてだに。思はぬ敵におとされて。主上を始め奉り。一門の人も悉く。花の都を立ちいで。西海の浦に越きぬ。習はぬ旅の道すがら。山を越に海を渡り。しばしは天さがる。鄙^{ヒノ}の住居の身なりしに。又立ち歸る浦波の。須磨の山路や一の谷。生田の森に着きしかば。こゝは都も程近しと。一門の人々も。よろこびをなし、折節に。 シテ「範頼義經の其勢。地^チ雲や霞の如くにて。暫く戦ふといへども。平家は運も柳弓の。やたけ心もよわくと。皆散りぐに爲りはて。あはれも深き生田川の。身を捨てし物語。かたるうよしなかりける。 シテ「うれしやな夢の契の假初ながら。親子鸚鵡の袖ふれて。地^チ名残つさせぬ心かな。」 シテ詞「あれに見わたるは如何なる者ぞ。何閻王よりの御使とや。

修羅 六道の二つまで合戦を事とする世界。

愧かしや子ながらも 我子なはらひかる者達のさまを見するは耻づかしとなり。

立ち去る姿はかげろふの 姿の影ふりて消ゆる事を「かげろふの小野」と云ふ大和の名所ふ云ひかけたり。 野邊のちがやふに「露霜の如く消えて跡なきを云ふ。

前シテ 後シテ 三吉野の奥に山居の僧にて候ふ。 我名所には住み候へども。 未だ花の都を見ず候ふ程に。 此春思ひ立ち都に上り。 洛陽の名所舊跡をも一見せばやと思ひ候ふ。 道行「三吉野の。 高嶺の深雪まださえて。 花遅げなる春風の。 吹さくる象の山越えて、霞む其方や三笠山。 茂き梢も梢の葉の。 廣き御影の道直に。 花の都に着きにけり。

片時の暇と有りつるに。 今までの遅参心得すと。 閻王怒らせ給ふぞと。 地「いふかと思れば不思議やな。 黒雲俄に立ち來り。 猛火を放ち劍を降らして。 其數しらざる修羅の敵。 天地を響かし満ち満ちたり。 シテ「物々し明暮に。 地「なれつる修羅の敵ぞかしと。 太刀眞向にさしかさし。 こゝやかしこゝ走り廻り。 火花を散して戦ひしが。 暫く有りて黒雲も。 次第に立ち去り修羅の敵も。 忽に消に失せて。 月澄み渡りて明々たる。 曉の空とすなりたりける。 シテ「愧かしや子ながらも。 地「かく苦しみを見る事よ。 急ぎ歸りてなき跡を。 懸に用てたび給へと。 泣くく杖を引き別れ。 立ち去る姿はかげろふの。 小野の淺茅の露霜と。 形は消て失せにけり。

胡蝶

信光作

ワキ次第 春立つ空の旅衣。 日も長閑なる山路かな。 詞「是は和州

我名所には住み候へども。 未だ花の都を見ず候ふ程に。 此春思ひ立ち都に上り。 洛陽の名所舊跡をも一見せばやと思ひ候ふ。 道行「三吉野の。 高嶺の深雪まださえて。 花遅げなる春風の。 吹さくる象の山越えて、霞む其方や三笠山。 茂き梢も梢の葉の。 廣き御影の道直に。 花の都に着きにけり。

三吉野の奥に山居の僧にて候ふ。 我名所には住み候へども。 未だ花の都を見ず候ふ程に。 此春思ひ立ち都に上り。 洛陽の名所舊跡をも一見せばやと思ひ候ふ。 道行「三吉野の。 高嶺の深雪まださえて。 花遅げなる春風の。 吹さくる象の山越えて、霞む其方や三笠山。 茂き梢も梢の葉の。 廣き御影の道直に。 花の都に着きにけり。

ひばた 梅の皮もて書きたる根。 昔忍ぶの忘れ草。 忍ぶも忘れ草の盛と見えて候ふ。 立ち寄り詠めばやと思ひ候ふ。

三吉野の奥に山居の僧にて候ふ。 我名所には住み候へども。 未だ花の都を見ず候ふ程に。 此春思ひ立ち都に上り。 洛陽の名所舊跡をも一見せばやと思ひ候ふ。 道行「三吉野の。 高嶺の深雪まださえて。 花遅げなる春風の。 吹さくる象の山越えて、霞む其方や三笠山。 茂き梢も梢の葉の。 廣き御影の道直に。 花の都に着きにけり。 「急ぎ候ふ間。 程なう都に着きて候ふ。 此所を人に尋ねて候へば。 一條大宮とやらん申し候ふ。 心静かに一見せばやと思ひ候ふ。 又是なる所を見れば。 よしありげなる古宮の。 軒の檜皮も苦むして。 昔忍ぶの忘れ草。 誠によしある所なり。 又車寄の邊なる。 柴垣の隙より見れば。 御階の下に色異なる梅花の。 今を盛と見えて候ふ。 立ち寄り詠めばやと思ひ候ふ。 シテ詞「のうく御僧は何處と思し召して。 此梅を詠め給ひ候ふ

中絶して云ひし 直に歸らん

人知れず 人ふら知らせずの

扱もく 是より手紙の文句。

假初^{カキ}立ち出で。やがてと云ひし其主^{ヌシ}は。昔語りにはやなりて。形見を見る涙なる。

ロンギンテ「扱や最期の折節ハ。いかなる事か宣ひし。委しく語りおのしませ。せめてハ聞いて慰まん。ワキ「たゞ故郷の御事を

おぼつかなく思召し。御最期までも人知れず。ひそかに御証ありしなり。シテ「實にやそこそおはすらめ。三年離れて其後

は。我も御名残。いつの世にかは念るべき。ワキ「御ことわりと思へども。歎きをとりめおのしませ。形見を御覽候へ。シテ「實に

や歎きても。かひなき世ぞと思へば。形見を見るからに。すすむ涙はせきあへず。

ワキ「花若殿の御文の候ふ。これを御覽候へ。シテ「扱もく父御前。痛はりつかせ給ひ。程なく空しくなり給へば。心の内の

悲しさは。唯おぼしめしやらせ給へ。我も歸りて御ありさま。

出づるなり 出家するの意。命つれなく候ハ。命が無情な故をすむ有りしなラハ。命の

恨みながらも云々 恨みのあまき故ぞと云々。實にかはら

善光寺 水内郡あり。阿彌陀如来を本尊とす。昔ハ河内郡院とも百濟寺とも云へり。

加茶堂 善光寺の本堂を云ふ。

見参らせたくは候へども。思ひ立ちぬる修行の道。もしや止められ申さんと。思ふ心を使りて。心づよくも出づるなり。命つれなく候は。三年が内は参るべし。様々の形見を御覽じて。御心を慰みおはしませと。書いたる文の恨めしや。なからん父が名残には。子ほどの形見あるべきか。父が別れは如何なれば。悲しみ修行に出づる身の。などや生きてある。母に姿を見みはんと。思ふ心のなかるらん。恨めしの我子や。うき時は。恨みながらもさりとは。我子のゆくへ安穩に。守らせ給へ神佛と。祈る心ぞあはれなる。

僧詞「かやうに候ふ者は。信濃の國善光寺の住僧にて候ふ。又是に渡り候ふ人は。いづくとも知らず愚僧を頼むよし仰せ候ふ程に。師弟の契約をなし。此ほど出家させ申して候ふ。さる間毎日如來堂へ伴なひ申し候ふ。今日も又参らばやと思ひ候ふ。

のせき。... 月... 山... 鳥... 紫...
月... 山... 鳥... 紫...
月... 山... 鳥... 紫...

レ「扱其姿は。シテ」笠に簀。ツレ「身の浮世とや竹の杖。シテ」月に
ハ行くも暗からず。ツレ「扱雪にハ。シテ」袖を打ち拂ひ。ツレ「扱
雨の夜は。シテ」目に見えぬ鬼一口も恐ろしや。ツレ「たましく雲
らぬ時だにも。シテ」身一人に降る涙の雨か。あら暗の夜や。ツ
レ「夕暮は。一方ならぬ思ひかな。シテ」夕暮は何と。一方なら
ぬ思ひかな。シテ「月は待つらん我をば待たじ。虚言や。地鳴は。
數々多き思ひかな。シテ」我爲めならば。鳥もよこ鳴け鐘も唯
鳴れ。夜も明けよたゞ。一人寐ならばつらからじ。シテ「かやうに
心を盡しくて。地」かやうに心を盡しくて。榻の數々よみて
見たれば。九十九夜なり。今は一夜ようれしやとて。待つ日に
なりぬ。急ぎて行かん。姿は如何に。シテ「笠も見苦し。風折
鳥帽子。シテ」簀をもぬき捨て。花指衣の。シテ「色重ね。裏
紫の。シテ」藤袴。地「待つらん物を。シテ」あら急がしやすは早今

月... 山... 鳥... 紫...
月... 山... 鳥... 紫...
月... 山... 鳥... 紫...

日も。地「紅の袴衣の。衣紋けたかく引きつころひ。飲酒は如何
に。月の盃なりとて。戒めならば保たんと。唯一念の悟れて
多くの罪を滅して。小野の小町も少將も。共に佛道成りにけ
り。

當麻

元清作

ワキ次第「教へうれしき法の門。開くる道に出でうよ。是は念
佛の行者にて候ふ。我此度三熊野に参り。下向道に越きて候
ふ。又是より大和路にかゝり。當麻の御寺に参らばやと思ひ候

行く。ワキ詞「言語道斷。かゝる聊爾なる御事にて候ふ。さやうの御心中有るならば。敵の前のたふれなるべし。只先づ歸りたまへどて。地「手とり足とりいざなひ。別當の坊に歸りけり。ワキ「抑佛陀の御誓願。本より衆生の所願を満て。ワキ「是も年月思ひふかき。ワキ「箱根の海の恨をなす。ワキ「敵を亡ぼしたる給は。ワキ「惡魔降伏の御誓ひ。ワキ「惡しきを平らげよきを助くる。ワキ「其御威光を頼まんど。ワキ「こゝはの行者。ワキ「十餘人。地「護摩の壇上をかまへつ。凡ろ飛ぶ鳥をも。れとすばかりと面々に。刃の驗徳を顯はして。地「年頃たのみをかくる大聖不動明王の。火燄に愚老が其身をこがし。五智の如來に五体を投げ。大威徳の乗り給ふ。水牛の角に命をかけ。かうべをかたむけ數珠をもみ。藥師の眞言千手の陀羅尼。妙音聲を高くあげ。後シテ「抑是は。中央に立つて惡魔を降伏し衆生を守る。大聖不

此の行者。是ことと護摩の壇。大を焚きて新羅を射行する場所。不動の刀もてしてしをあらうハす。五智の如來。一は法界体性智。二は妙觀察智。三は平等性智。四は妙淨觀智。五は成所作智。水牛の角に命をかけ。命を佛前ふ差し出してのま。佛師の眞言。藥師如來の前申すべし咒文。千手の陀羅尼。千手觀音の申すべし咒文。

東方。東方降三世明王と新羅を焚きて。云ひかけてまを焚し中央に立つて。五大明王の眞中不動の煙。不動の火燄。光明赫奕として。氣色もあらたに五大尊の。四面の佛前に顯はれ給ひて。かの形代を調伏し給ふ。あら有りがたや怖ろしや。山河草木震動して。箱根の海山の。御法もおのづから。實相の色を顯はし。自性の月の光を添へて。護摩の煙の上も隈なき。鈴の聲耳に通じて。明々とすみやかなり。東方の降三世明王は。降三世明王は。青蓮のまなじりに惡魔を降伏して。壇上に翺り給へば。南方の軍荼利夜叉は。火燄のほのほを吹きかけ給へば。大威徳は水牛の。角振りたて、顯はれ給へば。北方の金剛夜叉は。寒風の鐵雨をふらして。大紅蓮の責めをなせば。中央の大聖不動は。さつくの繩にて祐經が。形代を巻き縛り。護摩の壇上に引き伏せて。利劔を振りあげ刺し通して。猶嚴重

東方。東方降三世明王と新羅を焚きて。云ひかけてまを焚し中央に立つて。五大明王の眞中不動の煙。不動の火燄。光明赫奕として。氣色もあらたに五大尊の。四面の佛前に顯はれ給ひて。かの形代を調伏し給ふ。あら有りがたや怖ろしや。山河草木震動して。箱根の海山の。御法もおのづから。實相の色を顯はし。自性の月の光を添へて。護摩の煙の上も隈なき。鈴の聲耳に通じて。明々とすみやかなり。東方の降三世明王は。降三世明王は。青蓮のまなじりに惡魔を降伏して。壇上に翺り給へば。南方の軍荼利夜叉は。火燄のほのほを吹きかけ給へば。大威徳は水牛の。角振りたて、顯はれ給へば。北方の金剛夜叉は。寒風の鐵雨をふらして。大紅蓮の責めをなせば。中央の大聖不動は。さつくの繩にて祐經が。形代を巻き縛り。護摩の壇上に引き伏せて。利劔を振りあげ刺し通して。猶嚴重

東方。東方降三世明王と新羅を焚きて。云ひかけてまを焚し中央に立つて。五大明王の眞中不動の煙。不動の火燄。光明赫奕として。氣色もあらたに五大尊の。四面の佛前に顯はれ給ひて。かの形代を調伏し給ふ。あら有りがたや怖ろしや。山河草木震動して。箱根の海山の。御法もおのづから。實相の色を顯はし。自性の月の光を添へて。護摩の煙の上も隈なき。鈴の聲耳に通じて。明々とすみやかなり。東方の降三世明王は。降三世明王は。青蓮のまなじりに惡魔を降伏して。壇上に翺り給へば。南方の軍荼利夜叉は。火燄のほのほを吹きかけ給へば。大威徳は水牛の。角振りたて、顯はれ給へば。北方の金剛夜叉は。寒風の鐵雨をふらして。大紅蓮の責めをなせば。中央の大聖不動は。さつくの繩にて祐經が。形代を巻き縛り。護摩の壇上に引き伏せて。利劔を振りあげ刺し通して。猶嚴重

